特定野菜の生産・流通・消費動向

令和5年3月 独立行政法人農畜産業振興機構



目次

1	特定野菜とは	1頁	13	かぼちゃ	25頁	25	にんにく	59頁
2	アスパラガス	2	14	スイートコーン	28	26	やまのいも	61
3	カリフラワー	4	15	えだまめ	31	27	生しいたけ	64
4	セルリー	6	16	グリーンピース	34	28	いちご	67
5	ブロッコリー	8	17	さやいんげん	36	29	すいか	70
6	こまつな	11	18	さやえんどう	39	30	メロン	73
7	しゅんぎく	13	19	そらまめ	42	31	オクラ	76
8	ちんげんさい	15	20	かぶ	44	32	ししとうがらし	79
9	ふき	17	21	ごぼう	46	33	にがうり	81
10	みずな	19	22	れんこん	49	34	みょうが	84
11	みつば	21	23	かんしょ	52	35	らっきょう	86
12	にら	23	24	しょうが	55	36	わけぎ	88

〈使用した資料〉

- 国内生産量
- 輸入数量、輸入価格
- 国内価格及び入荷量
- ・国産と輸入品の出回り時期
- ・購入数量及び購入金額

農林水産省「野菜生産出荷統計」、「地域特産野菜生産状況調査」、「特用林産物生産統計調査」、「作物統計」

財務省「貿易統計」

東京都「東京都中央卸売市場年報」

農畜産業振興機構「ベジ探」、財務省「貿易統計」

総務省「家計調査報告」

1 特定野菜とは

- 「特定野菜」とは、国民生活上指定野菜(キャベツ、たまねぎなど14品目で出荷量の約7割)に準じる重要性を もつ野菜で、ブロッコリー、ちんげんさい、かぼちゃなど35品目が指定されている。
- 指定野菜に準じて消費生活上及び地域農業振興上重要な野菜で、野菜全体の作付面積の37%、出荷量の22%を占めている。物価に相当の影響を与える品目、端境期において重要な役割の品目、日常生活に欠かせない伝統的な品目等がある。

〇 特定野菜35品目

いちご

メロン



すいか

しょうが

生しいたけ

○ 特定野菜の位置付け(令和3年産)

品目	作付面積	出荷量	品目	作付面積	出荷量
			M H		
	ha	トン	_ ,	ha	トン
アスパラガス	4,500	22,400	ご ぼ う	7,410	116,700
カリフラワー	1,240	18,500	れんこん	3,980	43,200
セルリー	541	28,800	かんしょ	32,400	671,900
ブロッコリー	16,900	155,500	しょうが	1,730	38,200
こまつな	7,420	106,900	にんにく	2,520	14,000
しゅんぎく	1,800	22,400	やまのいも	6,890	150,000
ちんげんさい	2,100	37,200	生しいたけ	258	71,058
ふき	456	7,190	いちご	4,930	152,300
みずな	2,420	36,800	す い か	9,200	275,800
みっぱ	862	12,700	メ ロ ン	6,090	136,700
に ら	1,930	51,500	オ ク ラ	878	11,000
かぼちゃ	14,500	140,400	ししとうがらし	293	4,760
スイートコーン	21,500	178,400	にがうり	667	16,400
えだまめ	12,800	56,100	みょうが	214	5,250
グリーンピース	633	4,440	らっきょう	533	6,850
さやいんげん	4,810	24,400	わ け ぎ	56	658
さやえんどう	2,740	13,000	特定野菜計(A)	180,901	2,732,016
そらまめ	1,690	9,910	野 菜 計(B)	489,940	12,457,792
かぶ	4,010	90,700	(A) / (B)	37%	22%

資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」、「地域特産野菜生産状況調査」、「特用林産物

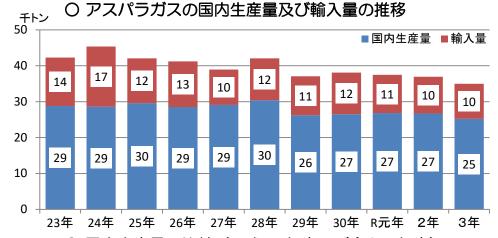
生産統計調査」及び「作物統計」

注意:野菜計は、上記の資料に掲載されている指定野菜14品目、特定野菜35品目及びその他野菜31品目の計である。また、すべての品目は調査されていない。

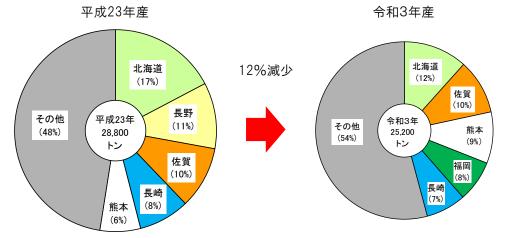
また、地域特産野菜生産業況調査は隔年での実施のため、オクラ、にがうり、みょうが、らっきょう及びわけぎは令和2年産実績である。

2 アスパラガス 🥢

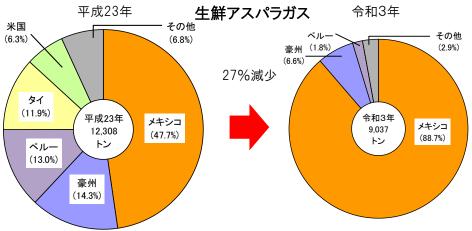
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、近年減少傾向(平成23年4.2万トン→令和3年3.5万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で72%とやや増加(平成23年68%)。輸入数量の減少も一因。
- 〇 国内生産量は減少傾向(令和3年は2.5万トン、平成23年比で88%)。上位5県では、福岡県(同158%)及び熊本県 (同126%)が増加。熊本県及び福岡県のシェアが上昇。北海道が大きく減少(4割減)。
- 令和3年の輸入量は平成23年比で73%と減少。生鮮アスパラは周年で輸入され、主に秋から春先の国産が少ない端境期に 多くなっている。主な輸入先国はメキシコ、豪州で、平成23年に比べてメキシコのシェアが大幅に拡大(平成23年47.7%→ 令和3年88.7%)。その他調整品として年間800~1,000トン程度輸入され、その大半がホワイトアスパラの缶詰。

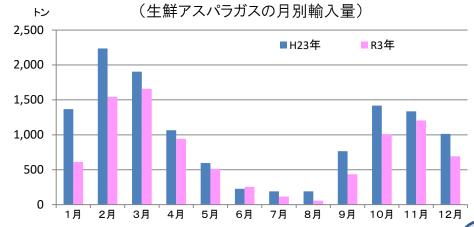


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



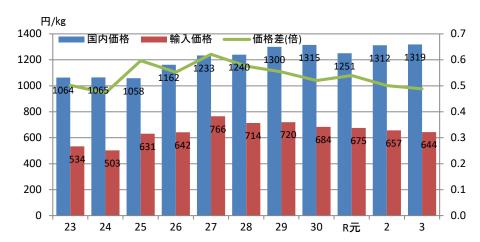
〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



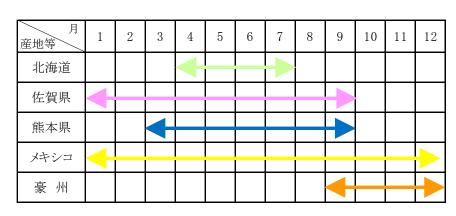


- 令和3年の生鮮アスパラガスの輸入価格(CIF価格)は、1 kg当たり644円で国産価格1,319円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の5割程度。この10年は5割~6割で推移。輸入先国で比較的輸入価格が安価なメキシコ産の割合が増えたため輸入価格は低下傾向。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、4,722トンで平成23年に比べて大幅に減少(平成23年比73%)。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった茨城県(同301%)及び福岡県(同235%)、その他の県では栃木県(同190%)及び山形県(同106%)が増加。輸入品は、国産の出回りが少なくなる10月~3月までは豪州産、メキシコ産が入荷量の多くを占めている。

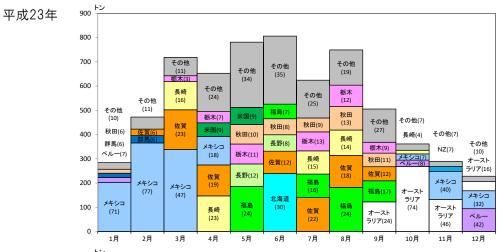
○ 国産アスパラガスと輸入アスパラガスの価格の比較



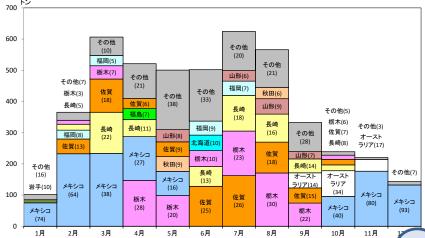
○ 国産アスパラガスと輸入アスパラガスの出回り時期



東京都中央卸売市場の入荷量



令和3年

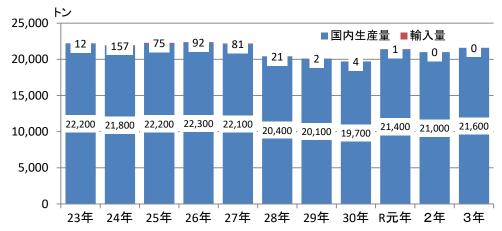


3

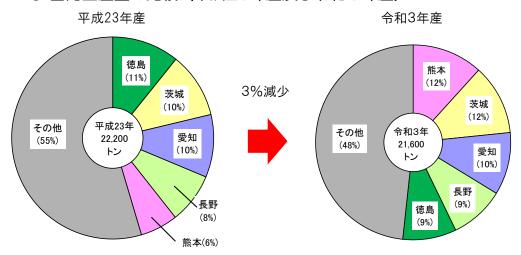
3 カリフラワー

- つ 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向。(平成23年2.22万トン→令和3年2.16万トン)輸入の減少も一因。
- 国内生産量はやや減少(令和3年は2.16万トン、平成23年比で97%)。平成28年以降は横ばい傾向で推移。上位5県では、熊本県(同189%)、長野県(同110%)及び茨城県(同108%)が増加。
- 〇 令和3年の輸入量は2年に続いてOと、平成29年以降減少傾向。これまでは主に外食等の業務用向けに、輸入先は米国のみであった。令和2年以降の輸入量Oは、国内の外食需要の減少に加えて、米国内の流通等がコロナの影響による混乱も一因。

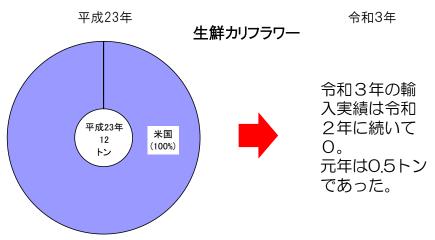
○ カリフラワーの国内生産量及び輸入量の推移

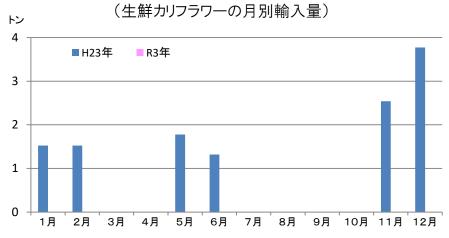


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



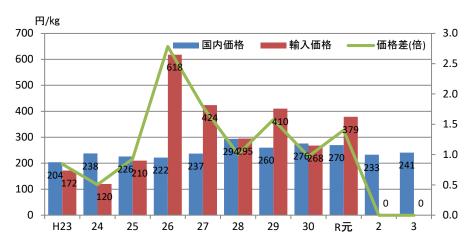
○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



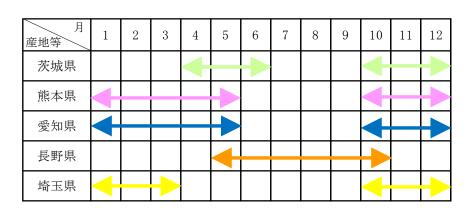


- 令和3年の輸入価格(CIF価格)は、令和2年に続いて輸入実績がないため0円。近年では、平成26年を除いて国産価格の 0.5~1.8倍程度。23年以降、輸入価格の変動が大きい。ほぼ外食等の業務用として輸入されており、過去には価格が高くな る年末に、米国産が市場にも出荷されることもあった。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、4,000トンで平成23年に比べて増加(平成23年比122%)。10月から年末にかけて入荷量が大きく増加。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった神奈川県が13倍、熊本県(同527%)及び群馬県(同461%)、その他の県は茨城県(同146%)、長野県(同133%)及び新潟県(同118%)が増加する一方、愛知県が9割、埼玉県7割、福岡県が6割程度にそれぞれ減少。

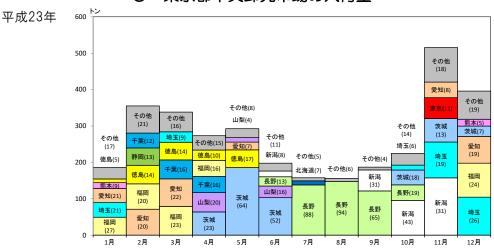
○ 国産カリフラワーと輸入カリフラワーの価格の比較



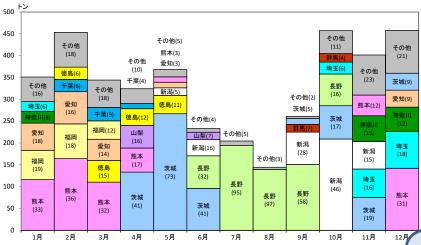
〇 国産カリフラワーと輸入カリフラワーの出回り時期



〇 東京都中央卸売市場の入荷量

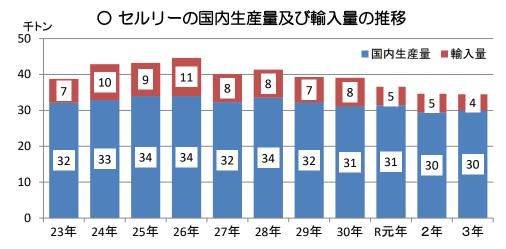


令和3年

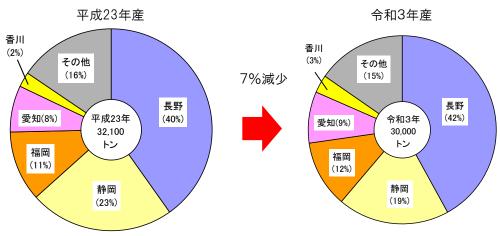


4 セルリー 🥕

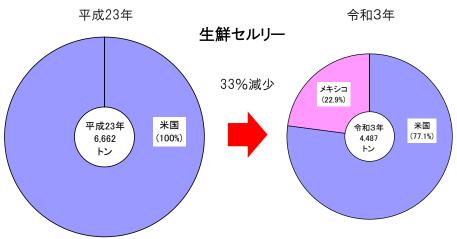
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、平成27年以降減少傾向(平成23年3.9万トン→令和3年3.4万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で87%と輸入量の減少もあり増加(平成23年は83%)。
- 〇 国内生産量は、平成27年以降減少傾向(令和3年は3.0万トン、平成23年比で93%)。上位5県では、香川県(同 121%)及び愛知県(同111%)が増加。
- 令和3年の輸入量は、平成23年比で67%に減少。周年で輸入されており、米国産が輸入量の太宗を占めるが(令和3年 シェア77%)、平成23年に比べてメキシコ産のシェアが大幅に拡大(平成23年シェア0%→令和3年23%)。

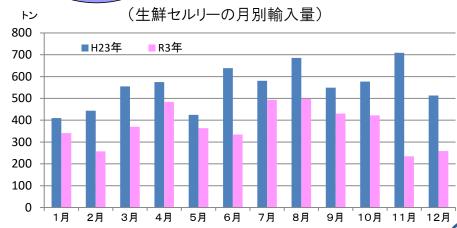


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



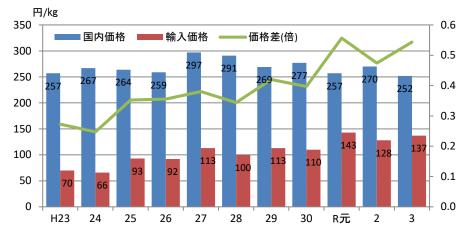
〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



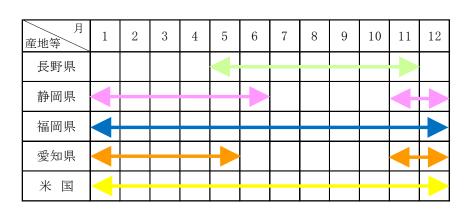


- 令和3年の輸入価格(CIF価格)は、1 kg当たり137円で国産価格252円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の5割程度。 この10年間は、国産価格の3~4割程度で推移。令和元年は米国産が大寒波の影響で生産量が減少し、3年はコロナウイルス の影響で海上運賃の高騰等もあり、輸入価格が上昇して価格差が縮小。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、8,051トンで平成23年に比べて減少(平成23年比79%)。上位10県では、香川県(同306%)、山形県(同140%)及び福岡県(同101%)が増加。また、平成23年当時入荷量が少なかった(その他海外(10t)に区分され不明)メキシコ産が増加。米国産が周年で月25~30トン程度が国産を補完するように入荷されているが、令和元年は米国産不作、3年はコロナ禍で米国内及び海上輸送混乱等のために年間を通じて入荷量は減少した。

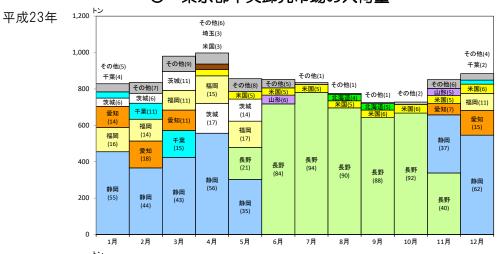
○ 国産セルリーと輸入セルリーの価格の比較



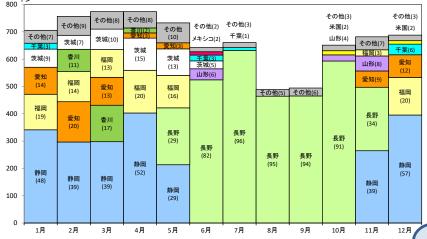
○ 国産セルリーと輸入セルリーの出回り時期



〇 東京都中央卸売市場の入荷量



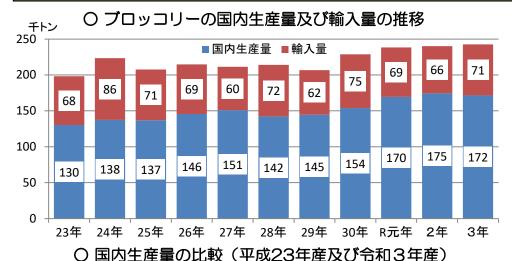
令和3年



7

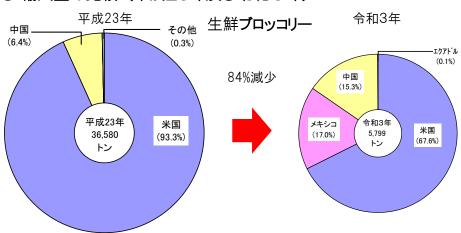
5 ブロッコリー 🥐

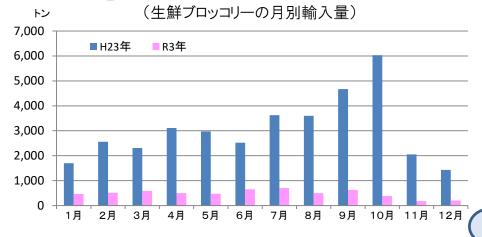
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、消費量の増加に伴い増加傾向(平成23年19.8万トン→令和3年24.2万トン)。
- 〇 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で71%で国産の生産量も増加もあり、増加(平成23年は66%)。冷凍ブロッコリーの輸入量が、家庭用・業務用の消費量が増えたことで増加(平成23年比207%)。
- 国内生産量は増加傾向(令和3年は17.2万トン、平成23年比で132%)で、上位5県では愛知県を除いて増加。徳島県 (同219%)、香川県(同162%)、北海道(131%)及び埼玉県(同117%)となった。その他の県も甲信、中国、九州 地域で増加している県が多い。
- 生鮮ブロッコリーの輸入量は令和3年で5,766トンでこの10年で8割減少。北海道をはじめ夏期の国産供給体制ができあがったことも一因。米国産のシェアが激減する一方、米国産より安価なメキシコ産と中国産が増大。



平成23年産 令和3年産 北海道 北海道 (16%) 32%增加 (16%) 愛知 埼玉(9%) 令和3年 平成23年 その他 その他 130,200 (50%) 171.600 (51%) 愛知(9%) 埼玉 (11%) 長野(5%)

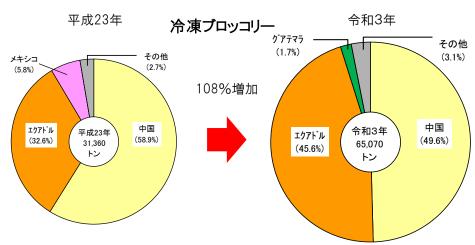
〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

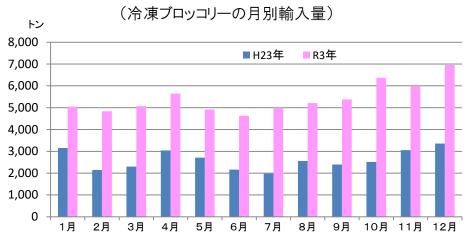




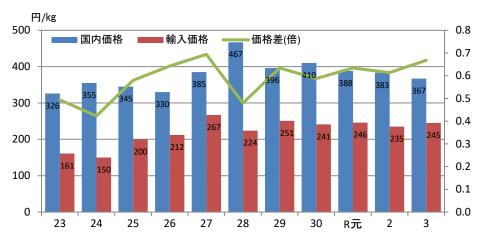
- 冷凍ブロッコリーの輸入量は、年々増加傾向(平成23年3.1万トン→令和3年6.5万トン)。主な輸入先は中国、エクアドルであるが、近年、エクアドルからの輸入が増加(平成23年比290%)。近年国産価格の高騰もあり、家庭での輸入ものの購入量が増加していることも一因で、家庭の冷凍ブロッコリーの購入が定着していると考えられる。
- 〇 令和3年の輸入価格(CIF価格)は、1 kg当たり245円で国産価格367円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の7割程度。 この10年間は5~6割、平成29年以降は6割程度で推移。令和3年はコロナ禍で海上運賃の高騰等もあり、価格差が縮小。
- 生鮮ブロッコリーの中国産及びメキシコ産は、卸売市場に入荷される数量は少なく、多くは加工・業務用に仕向けられる。 米国産は、国産が高くなると量販店でも販売され、輸入量も増える。

〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産ブロッコリーと輸入ブロッコリー(生鮮)の価格の比較

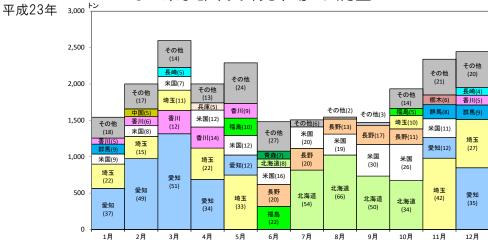


○ 国産ブロッコリーと輸入ブロッコリー(生鮮)の出回り時期

г							l				l		
	月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	北海道						lack				1		
Ī	埼玉県	1					-				4		-
ŀ	愛知県	₩,										1	
ŀ	アメリカ												
-					1								
	メキシコ												

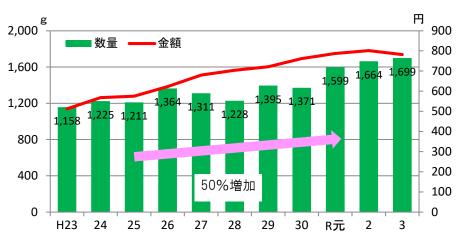
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、3.6万トンと増加(平成23年比154%)。北海道、長野県等の夏期の国内供給体制が構築されたことから、春から夏にかけては、米国産から国産にシフトした。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった熊本県85倍及び鳥取県79倍に、長崎県(同482%)、香川県(同427%)が大幅に増加するとともに、氷詰めや鮮度保持フィルム詰めでの流通が確立したことから、北海道(同217%)、長野県(同182%)及び群馬県(同139%)と夏場の産地も増加。主力産地の埼玉県(同66%)が大きく減少した。また、米国は4分の1となった。
- 令和3年の1人当たりの年間購入数量は1,699グラムと過去10年間で最も多く、購入金額は782円/kgとなった。消費者の健康志向や料理レシピも多彩になっていることもあり、それぞれが増加傾向。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量



令和3年 4,000 その他 (15) 3,500 その他 その他(2) その他 その他 長崎 (13) 青森(3) 埼玉(4) 3,000 福島(3) 愛知(6) その他 その他 長崎(11) 米国(4) その他 埼玉(13) 2,500 その他(3) 群馬(10 その他(1) 長崎 米国(5) 愛知(10) その他 2,000 米国(6) 埼玉(9) 長崎(10) 愛知(13) 長崎(11) 鳥取(7) 長野(17) 長野(16) 長野(16) 香川 能本 埼玉(13) 福島(11 香川 北海道 1,000 北海道 熊本 北海道 北海道 北海道 (31) 500 愛知 長野 埼玉 香川 (26) (23) (31) (20) 0 1月 2月 3月 4月 5月 7月 8月 11月

○ ブロッコリーの年間購入数量と購入金額の推移



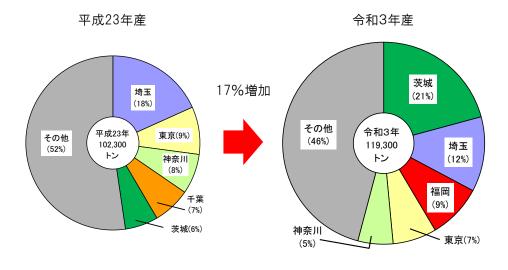
6 こまつな

- 国内生産量は増加傾向(令和3年は11.9万トン、平成23年比で117%)。上位5県では、茨城県(同396%)及び福岡県 (同182%)と大きく増加。発祥の地と言われている東京都(同92%)や埼玉県(同76%)は減少。ほうれんそうの需要が 減少する中、シュウ酸の処理することもなく調理しやすいこまつなに消費がシフトしたことも要因。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.4万トンと増加傾向(平成23年比132%)。上位10県では、平成23年当時入 荷量が少なかった栃木県が10倍、京都府(同218%)、他の県では茨城県(423%)及び福岡県(同114%)が増加。また、 近年茨城県及び群馬県のシェアが拡大。23年当時の主産地の埼玉県(同60%)、東京都(同33%)が大きく減少。

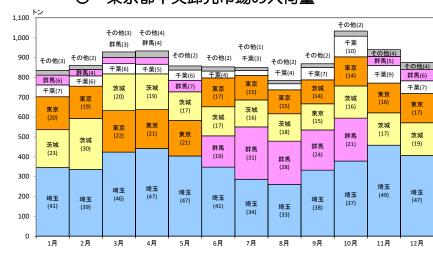
平成23年

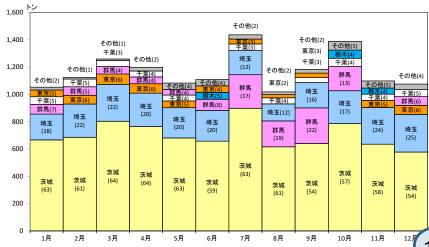
○ こまつなの国内生産量の推移 千トン 140 ■国内生産量 120 100 80 122 60 119 116 - 115 113 115 114 112 105 102 101 20 24年 25年 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 2年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量

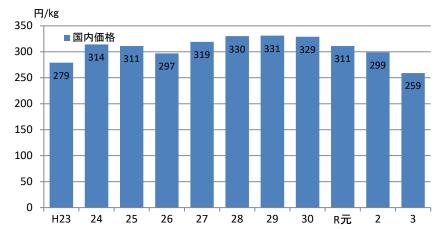


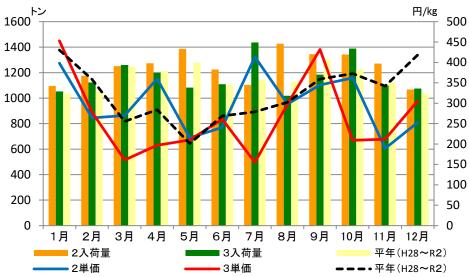


令和3年

- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり155~453円(年平均259円)の幅で推移している。年によって違いはあるものの、価格は年明けから夏場にかけて下がり、冬場に上がる傾向にある。正月商材としての引き合いが強い。令和2年7月の価格が高いのは、6月中旬から7月の中旬にかけて雨が多かったことから入荷量が減少して価格が高かった。
- 生産量の多い主産県では、露地栽培とハウス栽培を組み合わせて年に4~8回作付けされ、周年で出荷されている。上位は 茨城県、埼玉県、東京都、神奈川県、群馬県など関東近隣の産地が多くなっている。

○ こまつなの価格の比較(年別・月別)





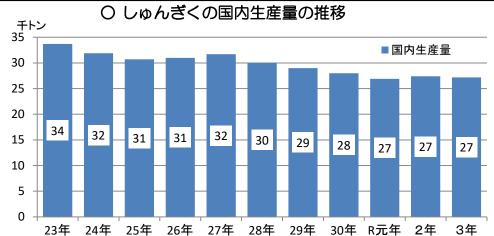
○こまつなの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
茨城県	lack											★
埼玉県	4											→
福岡県	lacktriangle											1
東京都	+											
神奈川県	lacksquare											

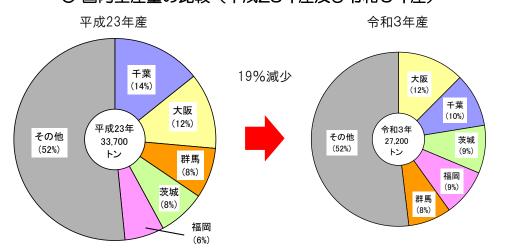
7 しゅんぎく 🎤

- 国内生産量は大きく減少(令和3年は2.7万トンで、平成23年比で81%)。上位5県では、福岡県(同112%)のみ増加した。独特の香りもあり好みがはっきりと分かれる野菜の一つで、すき焼きの具材、おひたし等和食の食材で、調理方法も限られていることから家庭の消費量が減少している。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1,909トンで減少(平成23年比75%)。周年で出回っているものの、需要が多くなる11月から翌年3月までが主な入荷時期。千葉県産や茨城県産を主体に、栃木県産や群馬県産など関東近県からの入荷が多い。夏場は宮城県産や岩手県産、青森県産などの東北産も入荷される。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった福岡県(同289%)、その他の県では茨城県(同151%)及び岩手県(同137%)が増加。

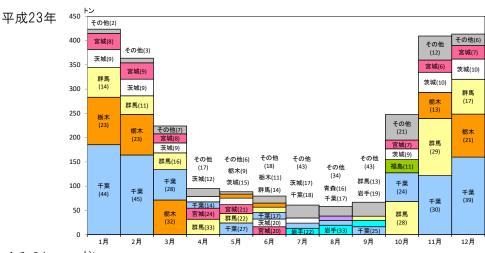
令和3年



○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

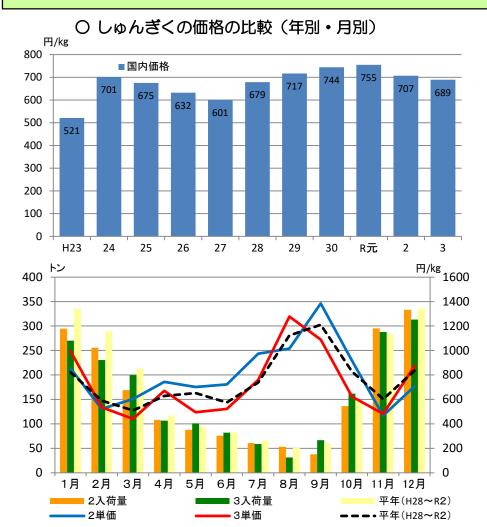


〇 東京都中央卸売市場の入荷量

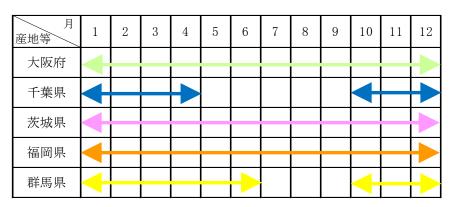




- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり441~1,277円(年平均689円)の幅で推移している。天候などの影響により年によって違いはあるものの、入荷量の少ない8月や9月に高値となり、その後低下するが、12月や1月には鍋物需要などで上昇に転じている。
- 生産量の多い主産地では、千葉県及び群馬県を除いて周年出荷されている。関東地域の主産地は、千葉県などの関東近隣産地で、関西地域では菊菜といわれて、大阪府、和歌山県、福岡県が主産地となっている。



○ しゅんぎくの出回り時期



8 ちんげんさい 🤘

- 国内生産量は減少傾向(令和3年は4.2万トンで、平成23年比で87%)。上位5県では、茨城県のみ平成23年と同程度と なり、その他の県は減少。全国をみとる福岡県が3割増加している。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、4,180トンと減少(平成23年比79%)。上位10県では、秋田県(同336%) と平成23年当時入荷量が少なかった山形県(同29倍)及び新潟県(23年は入荷0)以外は減少。周年で入荷されるが、北海 道・東北での生産が少ないことや群馬県が平成23年に比べ約8割減少したこともあり、夏場(7~9月)の入荷量が減少。

平成23年

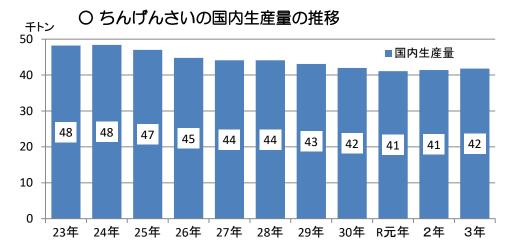
50

2月

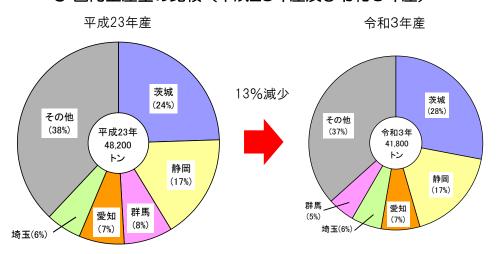
3月

4月

5月

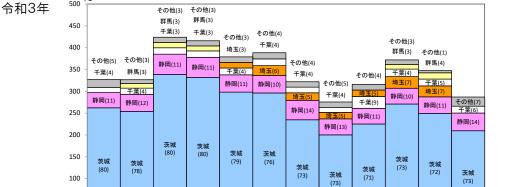


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量





7月

8月

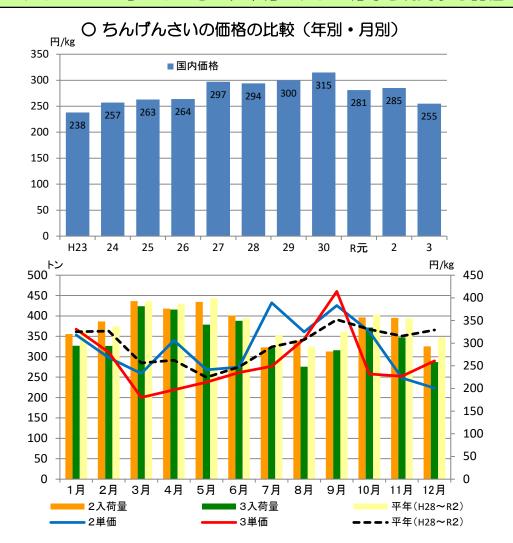
9月

10月

11月

(15

- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり180~414円(年平均255円)の幅で推移している。平成23年 以降は価格が上昇し、平成30年は315円と平成22年以降で最高となった。年間を通して一定の需要はある。露地物が出回る 3~7月は1キログラム当たり200~300円で推移し、ハウス物が出回る冬場にかけて上昇する傾向が見られる。
- 生産量の多い主産県では、周年で出荷されている。厳寒期を除いては露地栽培が中心となる。病気に強く様々な土壌で栽培が可能である。また、軽量なので収穫作栽の負担も少なく、栽培期間も短いなどの理由から産地も広がり、現在では手のひらサイズのミニちんげんさい、菜花のように花芽を利用する品種もある。

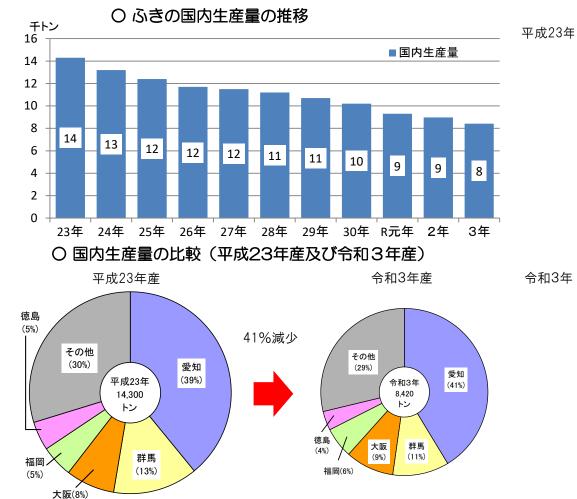


○ ちんげんさいの出回り時期

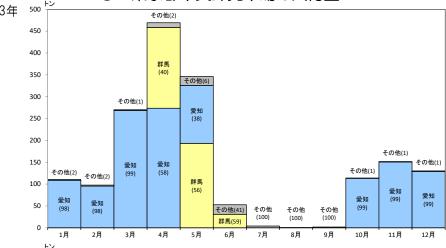
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
茨城県	lack											+
静岡県	lack											—
愛知県	lack											+
埼玉県	lack											+
群馬県	$ \mathbf{\psi} $											

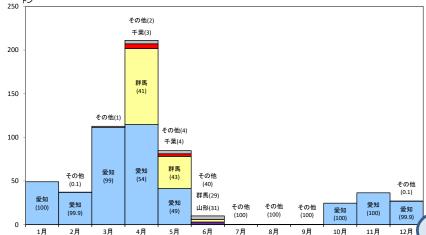
9 ふき 🐶

- 国内生産量は大きく減少(令和3年は8,420トンで、平成23年比で59%)。上位5県は全ての県で大きく減少。調理の下 処理に時間がかかり、煮物、佃煮等和食の食材で調理方法が少ないこと等から消費量が減少している。
- 秋田県や北海道では普通サイズのふき以外に、長さが1m以上になるものも栽培されている。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、594トンと大きく減少(平成23年比34%)。3月から5月に入荷が集中し、特に4月は主産地の愛知県産に加え群馬県産が入荷してピークとなる。愛知県と群馬県の2県で年間入荷量の96%を占める。上位10県では、栃木県(同288%)のみ増加。上位10県以外では、青森県(同26倍)及び新潟県(23年入荷0)が増加。

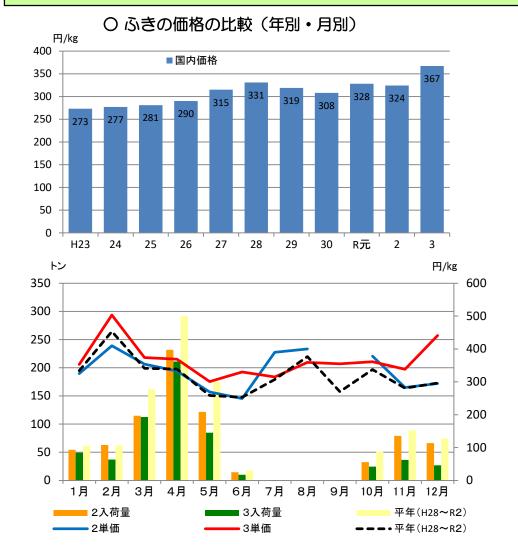


〇 東京都中央卸売市場の入荷量

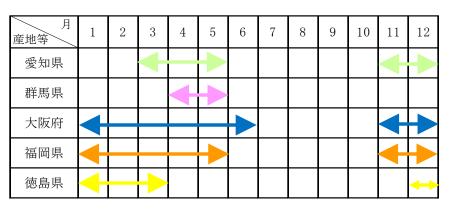




- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり301~503円(年平均367円)の幅で推移している。入荷の減少もあり、近年価格が上昇し、ここ10年では最も高くなった。夏場の消費は少ない。
- 6~9月はほとんど入荷がない。この時期は国産も少なく、業務用向けとして中国から入荷されることがある(貿易統計ではその他の生鮮野菜に区分)。
- 生産量の多い主産県では、秋口から春先までに出荷か集中し、夏場は極端に少なくなる。愛知県から全国に出荷されるもの の、関東地域は群馬県、関西地域は大阪府、徳島県等が主産地となっている。



〇 ふきの出回り時期

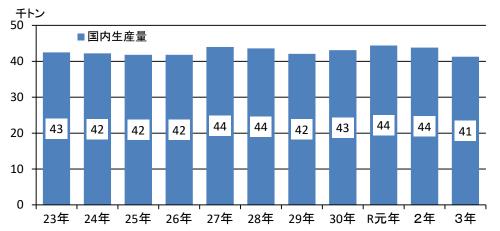


10 みずな

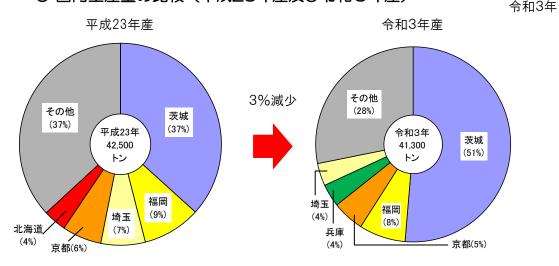
- 国内生産量は近年4.2万トン前後で推移(令和3年は4.1万トンで、平成23年比で97%)。上位5県では、茨城県(同 136%)のみ増加。茨城県は年々生産量が増加している。サラダや鍋に使用されることが多い。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、4,584トンと減少傾向(平成23年比62%)。市場を経由しない取引が多いとみられる。主産地の茨城県を主体に周年で入荷されているが、暑さに弱いため6月から10月始め頃まで入荷量が減少する。

平成23年

○ みずなの国内生産量の推移

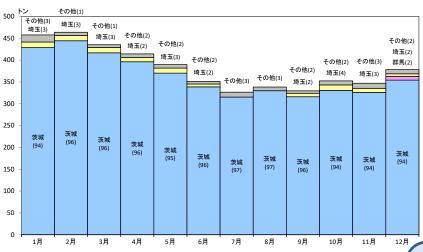


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量



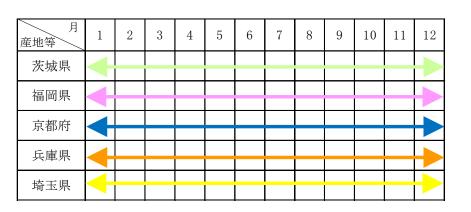


19

○ 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり192~482円(年平均308円)の幅で推移している。入荷の減少もあり、近年は350円前後で推移してたが、令和3年はコロナウイルスの影響で外食需要も振るわずにここ10年で最も安値となった。天候の影響は受けるものの、暑さに弱いことから6月以降は、入荷量の減少に伴い、価格は上昇傾向となる。また、平成30年は、前年の10月末に2度の台風の襲来があった後、急激に気温が下がったことから生育が進まず、11月以降に値を上げ翌年3月まで大幅な高値で推移したことに加えて、夏場の高温・干ばつ、9月の曇雨天、台風の被害で高値となった。 ○ 主産県では、近年、早生種を導入し、年間5~6回収穫作付けできる小株若取りを行い、周年で出荷されている。



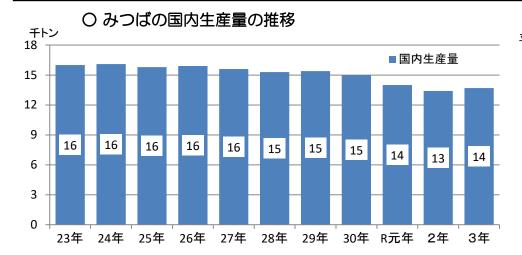
○ みずなの出回り時期



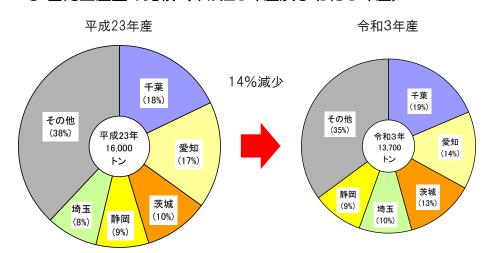
11 みつば

 国内生産量は減少傾向(令和3年は1.4万トン、平成23年比で86%)。上位5県では、茨城県(同105%)及び埼玉県 (同102%)が増加。茶碗蒸しなど和食の彩りに使用されることが多く、調理方法も限定されるため消費量も減少している。 糸みつばは家庭用として店頭で見かけることが多いが、切りみつばや根みつばは外食などの業務用として使われることが多い。 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1,673トンと減少(平成23年比73%)。上位10県では、 平成23年当時入荷量がほとんどなかった新潟県(同274%)及び群馬県(同245%)のみ増加。

令和3年



○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量

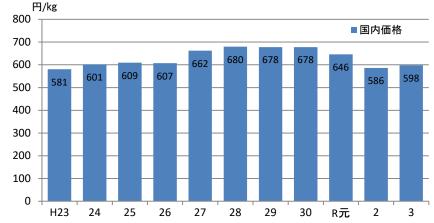


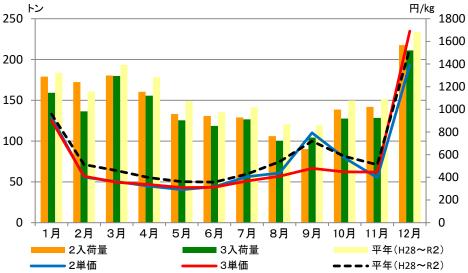


21

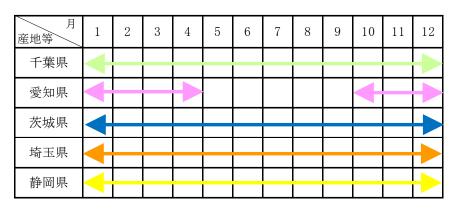
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり309~1,690円(年平均598円)の幅で推移している。入荷量の減少もあり、近年は650~680円前後で推移。令和3年は前年に続いて、コロナの影響で外食等での需要減少し、598円と平成24年以降では2年続けて600円を下回った。年により違いはあるが、1~6月頃までは下げ基調で推移し、7~9月頃にかけて上げ基調に転ずる。その後、需要期である12月に最高値となる傾向にある。天候による価格変動は少ない。
- 生産量の多い主産県では、周年で出荷がされている。多くが水耕栽培で生産され、さわやかな香りとみずみずしい緑、シャキッとした歯ごたえのみつばは、日本料理を引き立てる日本古来のハーブと言われている。

〇 みつばの価格の比較(年別・月別)





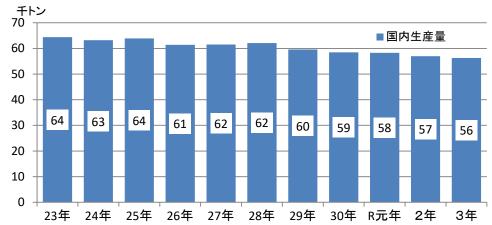
〇 みつばの出回り時期



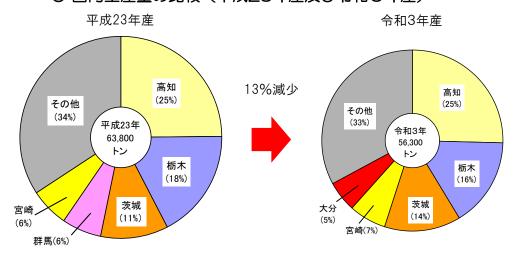
12 にら

- 国内生産量は平成28年以降、年々減少(令和3年は5.6万トン、平成23年比で87%)。上位5県では大分県(同126%) 及び茨城県(同110%)が増加。なお、比較的初期投資が少なく生産を始められ、刈り取った後の株から再び新葉が伸びて年 数回の収穫が可能な軽量野菜であるため、水田転作作物として推進する地域もある。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、8,340トンと減少(平成23年比88%)。1年を通じて栃木県と茨城県の2県で 5割以上を占め、6~9月は山形県、それ以外の月は高知県及び宮崎県の入荷が増加。これらの県の合計が各月の入荷量全体 の7割以上を占める。上位10県では、宮崎県(同269%)及び高知県(同131%)と西南暖地の産地が増加。

〇 にらの国内生産量の推移



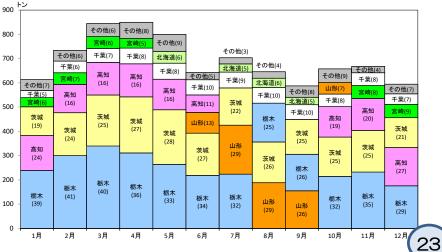
○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



○ 東京都中央卸売市場の入荷量

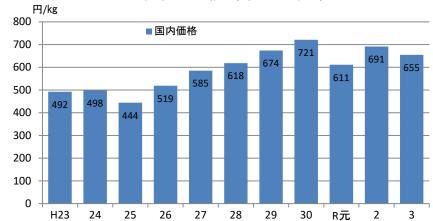


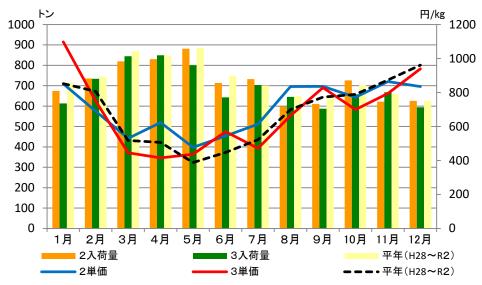
令和3年



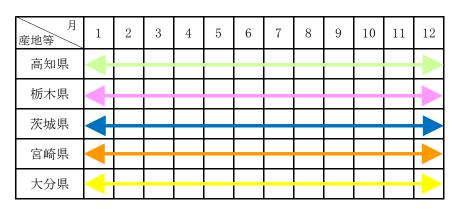
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり415~1,098円(年平均655円)の幅で推移している。入荷量の減少もあり、近年価格が上昇傾向で推移してした。コロナ禍で業務用需要が減退したこともあり、令和に入って価格は下げた。平成30年は、年明けの低温・曇雨天、夏場の高温・乾燥によりここ10年で最高値の721円となった。また、2月から6月にかけて下げ基調となり、入荷量が比較的少ない冬場に高値になる傾向がある。
- 生産量の多い主産県では、全ての県で周年出荷がされている。
- 業務用向けに中国から冷凍にら(カット)が輸入されている。

〇 にらの価格の比較(年別・月別)



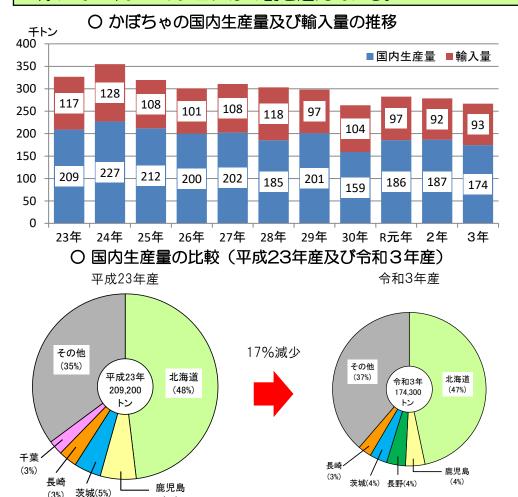


〇 にらの出回り時期

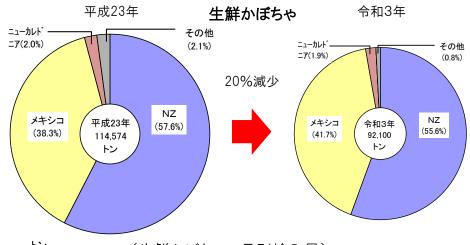


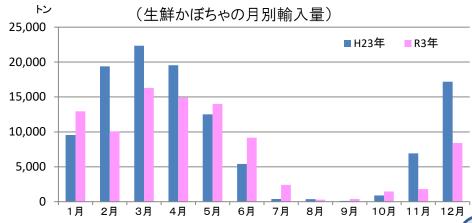
13 かぼちゃ

- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は減少傾向(令和3年は26.7万トン、平成23年比で82%)。国内生産量は年による増減が大きく、平成24年以降は減少傾向。輸入は、国産の作況によって増減する。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で65%とほぼ横ばい(平成23年64%)。
- 国内生産量は減少傾向(令和3年は17.4万トン、平成23年比83%)。上位5県では、長野県(同151%)のみ増加した。
- 令和3年の輸入量は、平成23年比で21%となった。生鮮かぼちゃが20%、冷凍かぼちゃが81%の減少。生鮮かぼちゃは主に秋から春先の国産が少ない時期に輸入される。平成17年の日・メキシコEPA発効もあり、平成24年以降では、令和2年を除いてメキシコのシェアは4割を超えている。



〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

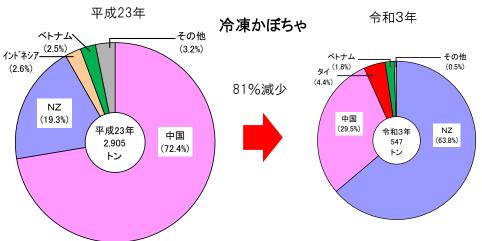




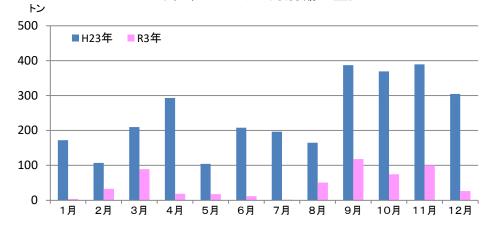
25

- 冷凍かぼちゃは、主に業務用として輸入されているが、輸入量は年々減少(平成23年2,905トン→令和3年547トン)。全ての主要輸入国で大きく減少している。輸入量が減少している中で、ニュージーランド産とタイ産の割合が増加。
- 令和3年の生鮮かぼちゃの輸入価格(CIF価格)は、90円/kgで国産価格202円/kg(東京都中央卸売市場の卸売価格)の4割程度。ここ10年間は3~5割で推移。年末は需要期となるので、価格は上がる傾向がある。

○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

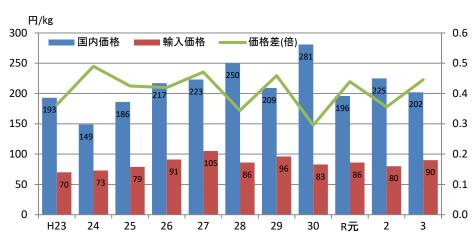


(冷凍かぼちゃの月別輸入量)



(冷凍かぼちゃは、貿易統計でその他冷凍野菜に区分されてデータがない。 植物防疫の検査数量を輸入数量として代用した。)

○ 国産かぼちゃと輸入かぼちゃの価格の比較

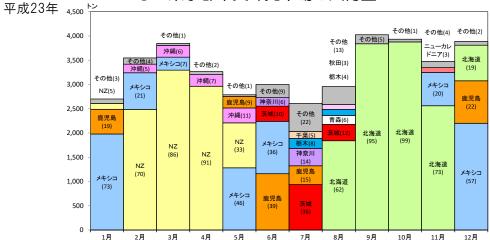


○ 国産かぼちゃと輸入かぼちゃの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
北海道							lack					₩
鹿児島県					+		*				+	
長野県								lack				
NZ	+	_			\							
メキシコ	lack					4	,				+	

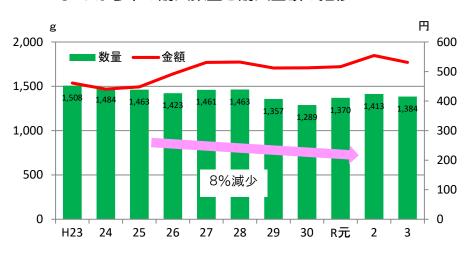
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2.8万トンと減少(平成23年比69%)。8月から11月までは北海道産が入荷量の大半を占め、12~6月はNZ産、メキシコ産が大半を占める、6~7月は鹿児島県産や茨城県産等が加わるなど、産地の棲み分けができている。国内産も減少したが、ニュージーランド産及びメキシコ産ともに3割以上減少。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった新潟県(同312%)、神奈川県(同101%)のみ増加。
- 令和3年の1人当たりの年間購入数量は1,384グラムで、年によって増減はあるが近年やや増加傾向。1人当たり年間購入金額は、531円/kgとなった。価格が高いときは購入量が減少する傾向があるが、栄養価も高く、冬至に食べると風邪をひかないといわれることもあり、冬場の貴重な緑黄色野菜としてニーズが高い。時短のため冷凍かぼちゃの購入も増加傾向。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量



令和3年 その他(1) 3,000 その他 その他(6) その他(5) その他(4) 韓国(4) メキシコ(6) その他(2) 神奈川(4 NZ(3) その他(1) 2,500 青森(5) 沖縄(11) その他(3) 鹿児島 神奈川(8) その他(2) その他 2,000 その他(1) (22) (22) 沖縄(8) 沖縄(10) 鹿児島(10) 北海道 メキシコ 1,500 北海道 (24) メキシコ 北海道 神奈川(13) 北海道 1,000 北海道 メキシコ (89) メキシコ NZ NZ メキシコ 500 (41) メキシコ (31) 1月 2月 4月 5月 7月 12月

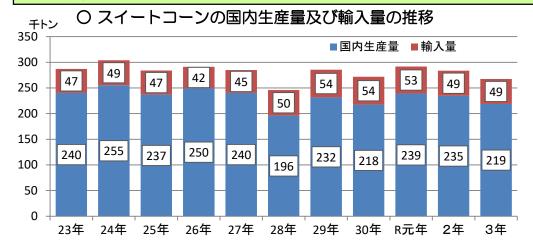
○ かぼちゃの購入数量と購入金額の推移



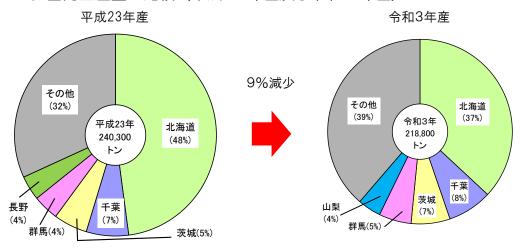
14 スイートコーン



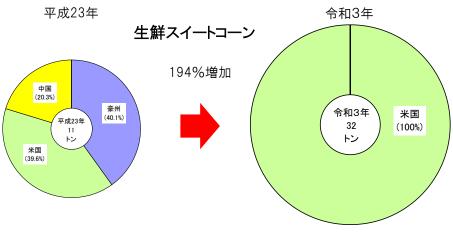
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、近年微減傾向(平成23年28.7万トン→令和3年26.8万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、国産の収穫量の減少もあり、令和3年で82%(平成23年は84%)。
- 〇 国内生産量は北海道産が台風で減少した平成28年及び30年は、北海道産が需要減による面積減、夏場の高温・干ばつで減少した令和3年を除き、近年235万トン前後で推移(令和3年は21.9万トン、平成23年比91%)。上位5県では群馬県(同125%)、茨城県(同115%)及び千葉県(105%)が増加。その他の県では、香川県が約5倍となっている。
- 〇 令和3年の輸入量は4.9万トンと増加(平成23年比104%)。平成28年以降輸入量は年間約5万トンを超え、その大部分が冷凍もの。生鮮ものの輸入は、平成23年に比べて194%増加した。生鮮スイートコーンは国産が高いときに輸入される。

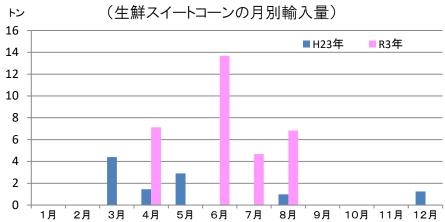


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

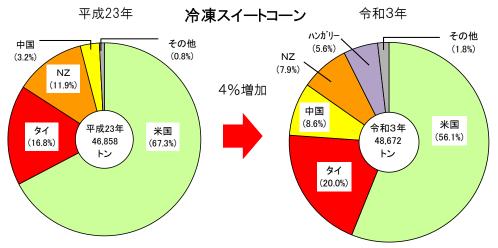


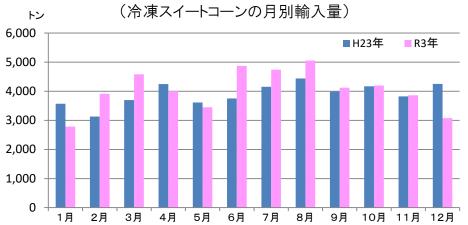


28

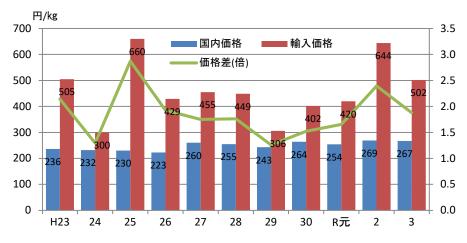
- 冷凍スイートコーンの輸入量は、増加傾向(平成23年4.7万トン→令和3年4.9万トン)。主要輸入先国は、米国、タイ、中国、ニュージーランドで、主要国のタイ、中国に加えてハンガリーからの輸入量が増加。外食等向けに周年輸入されている。
- 〇 令和3年の生鮮スイートコーンの輸入価格(CIF価格)は、1 kg当たり502円で国産価格267円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の1.9倍程度。この10年間は1.1~2.9倍で推移。国産が多い時期の価格は低いが、近年は、国産がない時期の輸入が多くなり、価格が高くなる傾向。
- 冷凍スイートコーンは主要国全てで周年で輸入されている。生鮮スイートコーンの輸入量は大きく減少し、令和3年は全量 米国から輸入され、海上運賃の高騰等もあり、輸入価格は例年より高くなった。前年は12月に豪州から輸入され高かった。

○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産スイートコーンと輸入スイートコーンの価格の比較

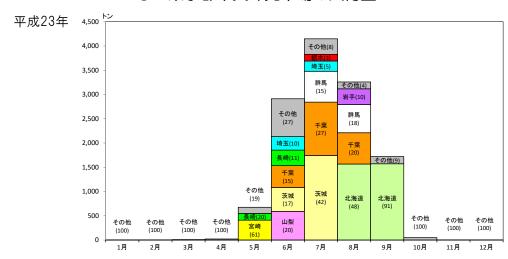


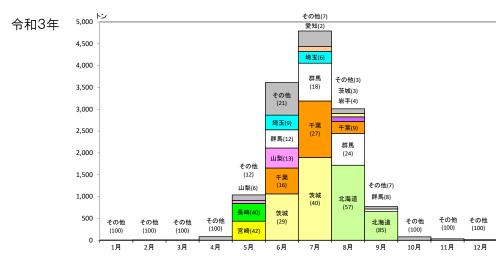
○ 国産スイートコーンと輸入スイートコーンの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
北海道							\blacklozenge			¥		
千葉県					+			*				
茨城県					+							
群馬県						lack						
米国(冷)	lack											\

○ 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.3万トンと増加(平成23年比105%)。代表的な夏の旬野菜であるため、6~8月にかけて入荷が集中する。5月のハウス栽培からトンネル栽培、露地栽培と継続的に出荷される。上位10県では、多くの県で増加している中で、群馬県(同144%)、茨城県(同134%)、愛知県(同131%)、埼玉県(同123%)及び長崎県(同120%)が大きく増加。

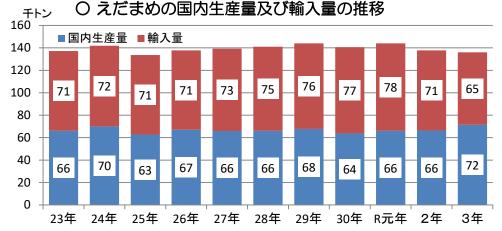
東京都中央卸売市場の入荷量



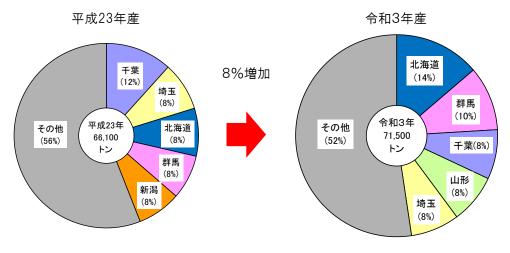


15 えだまめ 💺

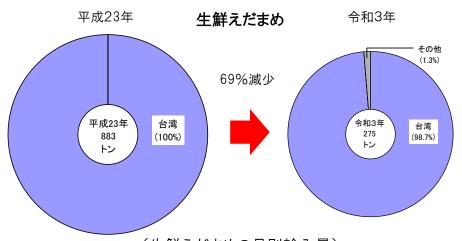
- つ 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、近年14万トン前後で推移(平成23年13.7万トン→令和3年13.6万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で53%(平成23年48%)。国内生産の増とコロナ禍での輸入減が要因。
- 国内生産量は近年横ばい傾向(令和3年は7.2万トンで、平成23年比で108%)。令和3年は天候に恵まれて収穫量が増加 した。上位5県では、北海道(同177%)、群馬県(同143%)及び山形県(同111%)が増加。その他の県では、香川県 (同180%)、秋田県(同120%)及び徳島県(同116%)が増加した。
- 〇 令和3年の輸入量は6.5万トンと減少(平成23年比91%)。そのほとんどが冷凍もので、令和3年は99.6%であった。生 鮮えだまめの輸入は、大半が台湾産で主に3~5月の国産が出回らない時期に輸入されているが、輸入量は減少傾向。

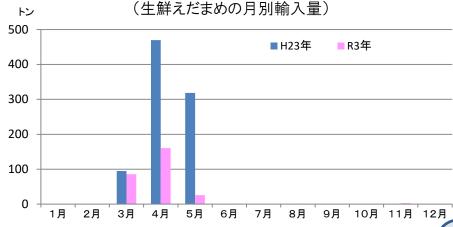


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

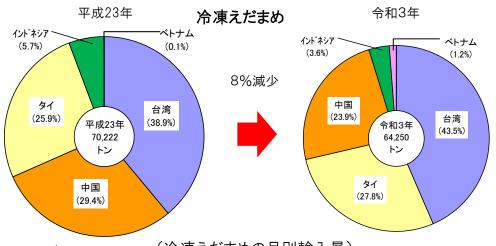


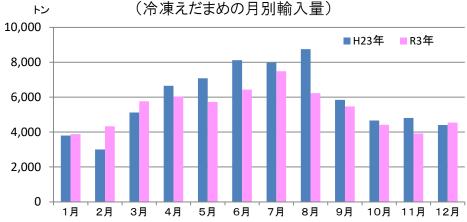


31

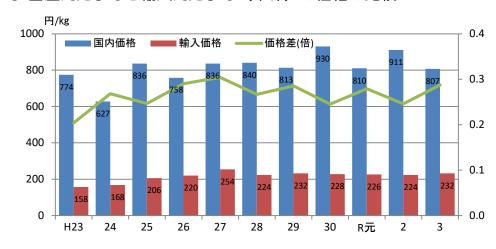
- 冷凍えだまめの輸入量は、平成23年以降7万台で推移していたが令和3年はコロナ禍が居酒屋等の外食需要の減退から減少した。主な輸入先国は台湾、タイ、中国、インドネシアで、近年、中国産のシェアが低下する一方、台湾産のシェアが拡大。
- 令和3年の冷凍えだまめの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり232円で国産価格807円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の3割程度。近年は2.5~3割で推移。内外価格差が大きい品目であり、輸入ものは主に居酒屋等の業務用向けであるが、量販店などでの販売も増加している。また、国産はほとんどが家庭内での消費となっている。
- 令和3年の冷凍えだまめは輸入量は6.4万トンと平成23年に比べて8%減少。台湾、タイ、中国、インドネシアなどの国から周年で輸入されている。

○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産えだまめと輸入えだまめ(冷凍)の価格の比較

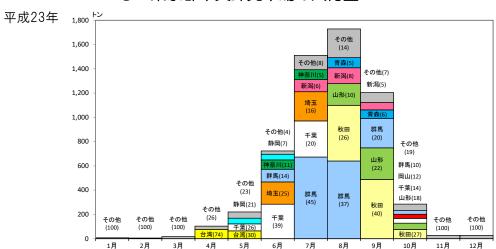


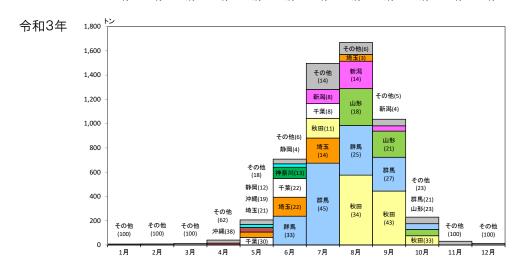
○ 国産えだまめと輸入えだまめ(冷凍)の出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
群馬県						lack			\			
北海道								lacktrianglelat				
千葉県					+							
台湾	+											-
タイ	+											\

○ 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、5,458トンと減少(平成23年比93%)。スイートコーン同様に夏が旬であるため、6~9月にかけて入荷が集中。近年、生産量が増加している秋田県の入荷量のシェアが拡大。上位10県では、平成23年当時入荷量が少なかった沖縄県(同178%)、その他の県では山形県(同133%)、新潟県(同129%)及び秋田県(同118%)が増加。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量





16 グリーンピース

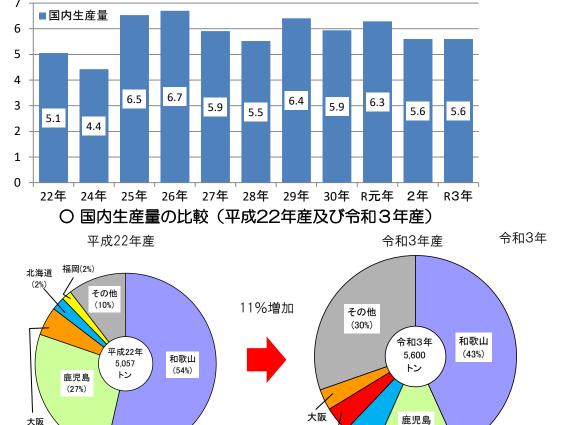
千トン

(5%)

○ グリーンピースの国内生産量の推移

- 国内生産量は、平成27年以降減少傾向(令和3年は5,600トン、平成22年比で111%)。上位5県では、和歌山県と鹿児島県の上位2県の生産量シェアがこの10年間で80%から57%に低下する一方、熊本県(20年比261%)及び北海道(22年比252%)が増加。(国内生産量は、22年までは地域特産野菜生産状況調査(隔年調査)、24年以降は生産出荷統計の数字である。23年は地域特産野菜生産状況調査未実施のため、22年と比較する。)
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、411トンと減少傾向(平成23年比57%)。上位10県では、23年の主要産地の 鹿児島県及び福岡県の入荷量は大きく減少し、生産が少なかった長崎県(同631%)及び和歌山県(同189%)や平成23年 当時入荷量が少なかった茨城県(同318%)が増加。

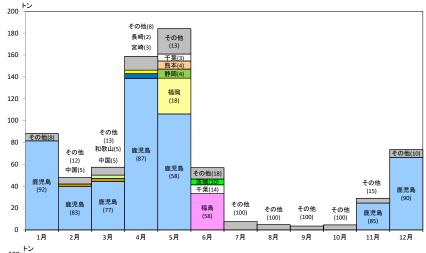
平成23年

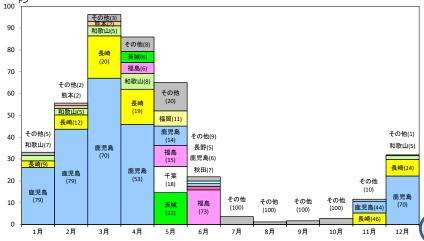


(14%)

北海道

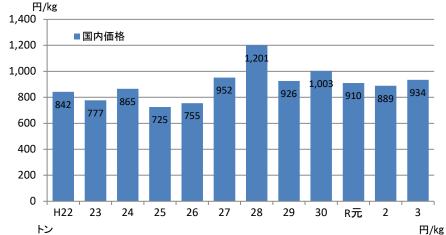
〇 東京都中央卸売市場の入荷量

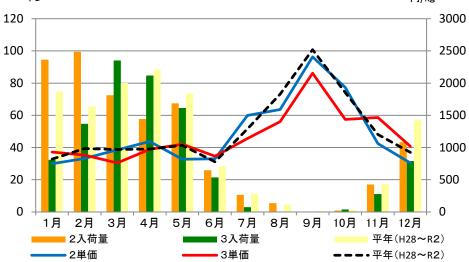




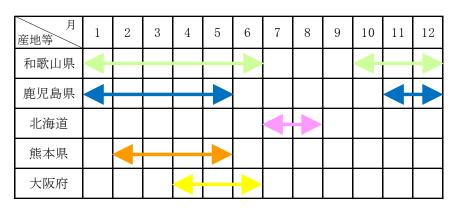
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり761~2,154円(年平均934円)の幅で推移している。入荷量の減少もあり、近年価格が上昇し、令和2年を除いて900円以上で推移。平成28年は天候不順で入荷量が減少し、過去10年で最高値となった。11月から鹿児島県の入荷が始まり、4月がピークとなる。5~8月にかけては北海道等からも入荷する。
- 生産量全国一の和歌山県では、夏場を除いて栽培され、関西圏への出荷が主体。関西で多く出回る「うすいえんどう」といえば「なにわの伝統野菜」としても知られ、関西地区では春先に欠かすことのできない食材である。北海道の生産増で7月の入荷量が増加傾向。

○ グリーンピースの価格の比較(年別・月別)





〇 グリーンピースの出回り時期

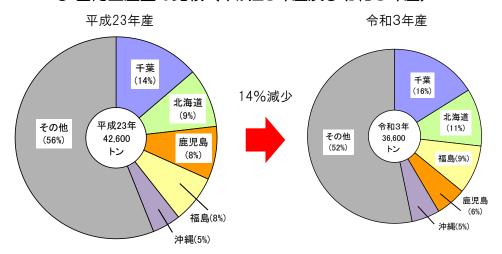


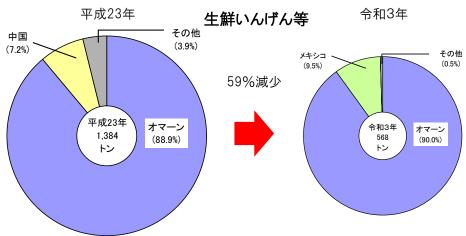
17 さやいんげん 🥠

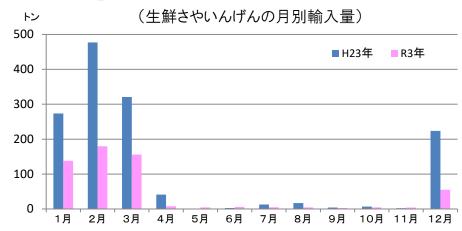
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、国内生産量の減少に伴い減少傾向(平成23年6.9万トン→令和3年6.0万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で61%と横ばい(平成23年61%)。
- 国内生産量は年々減少傾向(令和3年は3.7万トン、平成23年比86%)。上位5県では福島県(同102%)及び千葉県 (同101%)が増加。
- 輸入量は2.3~2.8万トンで推移。令和3年は2.3万トン。令和3年の生鮮いんげん等の輸入量は、平成27年以降増加していたが令和2年に続いて減少。23年以降一番少ない568トンとなった。12~3月まで国産の出回りが少ない時期に輸入される。

○ さやいんげんの国内生産量及び輸入量の推移 千トン ■国内生産量 ■輸入量 24年 25年 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 2年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

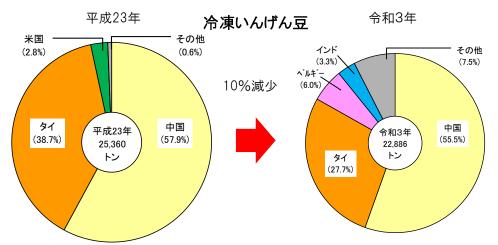


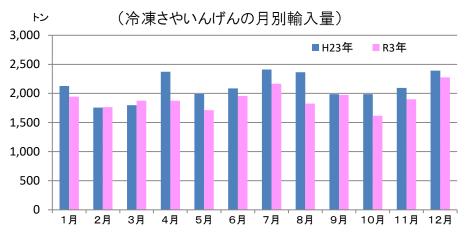




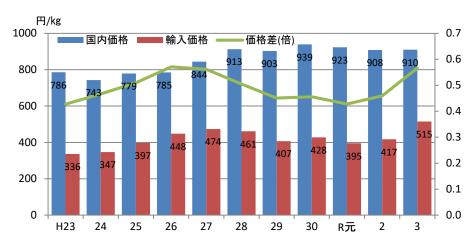
- 冷凍いんげん豆の輸入量は、近年微減傾向(令和3年は平成23年に比べて90%の2.3万トン)。主に業務用向けに周年で輸入され、ベルギー、インドからの輸入が増加。近年は、個人向けにネットでの販売もされている。
- 〇 令和3年の生鮮さやいんげんの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり515円で国産価格910円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の6割弱程度。この10年間でも4~6割の価格で推移。輸入品は業務用でも使われるが、国内産が少ない時期は量販店でも販売される。
- 令和3年の大阪中央卸売市場では、1~3月の入荷量1位がオマーン産となっている。

〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産さやいんげんと輸入さやいんげん(生鮮)の価格の比較

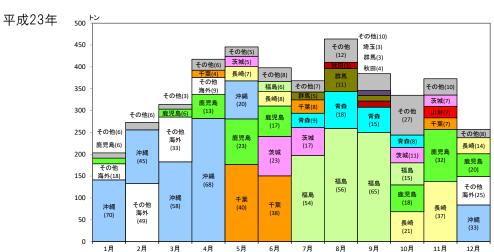


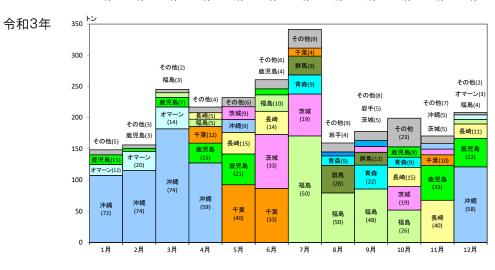
○ 国産さやいんげんと輸入さやいんげん(生鮮)の出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
千葉県				¥						lack	¥	
北海道							lack					
福島県						*				1		
鹿児島県	+					+				lack		
オマーン	lack											‡

○ 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,517トンと減少傾向(平成23年比60%)。12月から4月にかけては沖縄県が中心であるが、輸入品も入荷される。5月から12月にかけて福島県、千葉県及び茨城県などの関東近県からの出荷が中心。また、近年オマーン産の入荷量が増加しており、年末から3月にかけて入荷されるようになった。上位10県では、群馬県(同107%)のみが増加。また、オマーン産は平成23年には入荷がなかったので比較はできないが、入荷量は全国で9番目となっている。

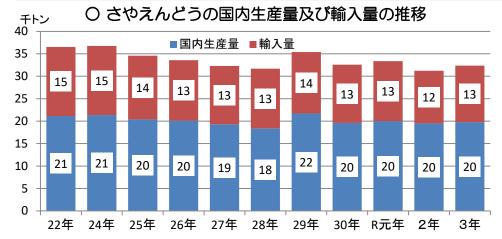
〇 東京都中央卸売市場の入荷量



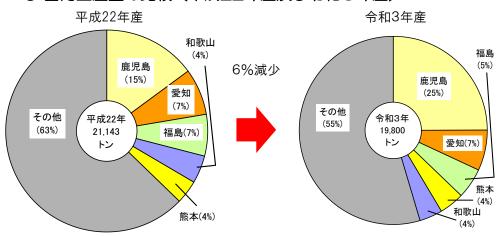


18 さやえんどう 🥒

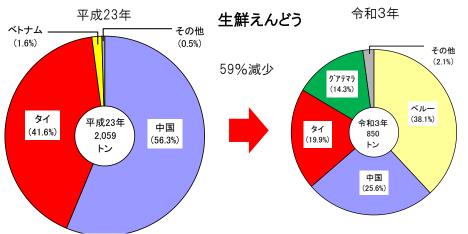
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向(平成22年3.7万トン→令和3年3.2万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で61%で増加(平成22年は58%)。生鮮えんどう及び冷凍えんどういずれの輸入量も減少したことも要因のひとつ。(国内生産量は、22年までは地域特産野菜生産状況調査(隔年調査)、24年以降は生産出荷統計の数字である。23年は地域特産野菜生産状況調査未実施のため、22年と比較する。)
- 〇 国内生産量は近年横ばい傾向(令和3年は2.0千トン、平成22年比で94%)。上位5県では、鹿児島県(同157%)及び 熊本県(同106%)が増加。
- 令和3年の輸入量は1.3万トンと減少(平成23年は1.3万トン)。このうち、生鮮ものの輸入量は減少(平成23年比41%)。中国、ベトナム、タイの割合が大きく減少。近年ペルー、グアテマラの割合が大きく増加。中南米からの輸入が増加。

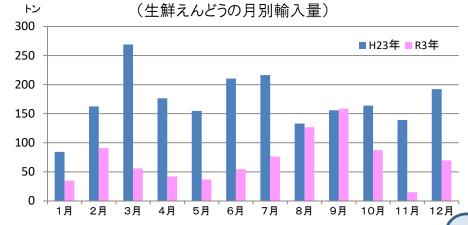


○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和3年産)



○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

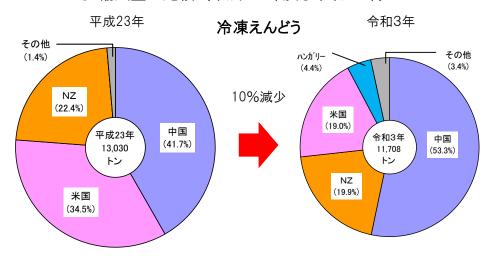




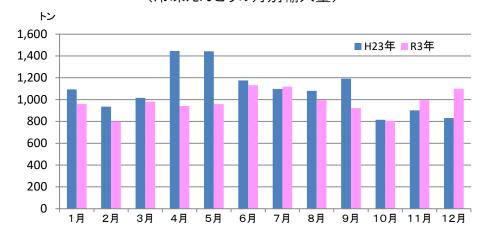
39

- 令和3年の冷凍えんどうの輸入量は、減少傾向(平成23年1.3万トン→令和3年1.2万トン、※統計上、さやえんどうとグリーンピースが含まれ、その輸入はグリーンピースが主と考えられる。)。
- 〇 令和3年の生鮮えんどうの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり612円で国産価格1,647円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の4割弱程度、令和3年は国産の価格が天候不順の影響等で高値となったため。この10年間でも3~5割と内外価格差が大きい品目のひとつ。主な輸入先国は、ペルー、中国、タイ、グアテマラで、外食等の業務用として市場入荷されている。

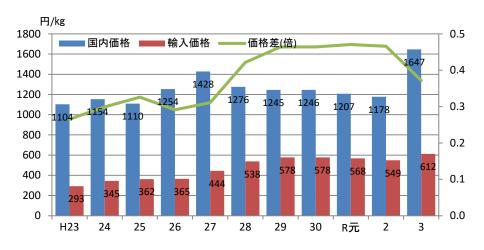
〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



(冷凍えんどうの月別輸入量)



○ 国産さやえんどうと輸入生鮮えんどうの価格の比較



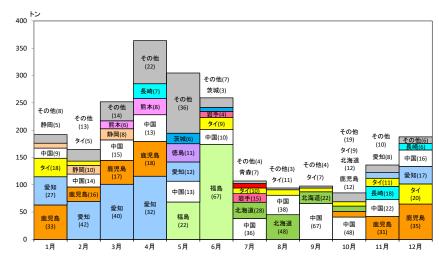
○ 国産さやえんどうと輸入生鮮えんどうの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
鹿児島県	lack				4						¥	1
愛知県	lack			4								
福島県					4							
ペルー						lack						
中国					lack							

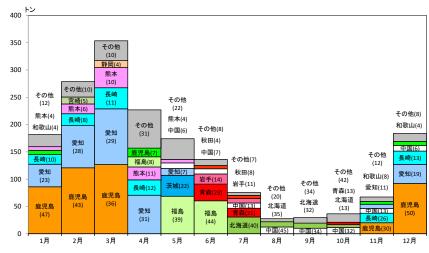
○ 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1,771トンと減少傾向(平成23年比79%)。平成17年以降、中国産の入荷量が年々が減少し、特に1~2月は大幅に減少。上位10県では、平成23年当時出荷が少なかった和歌山県(同1,112%)、青森県(同274%)及び茨城県(同160%)と長崎県(同145%)及び鹿児島県(同145%)が大きく増加。中国産は4分の1となった。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量





令和3年

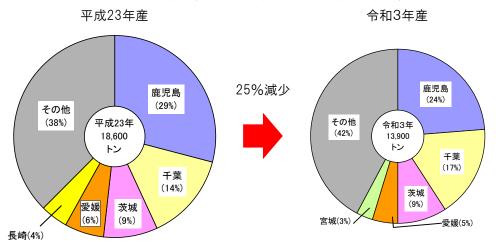


19 そらまめ 🥄

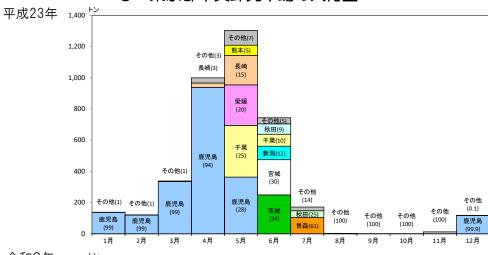
- 国内生産量は大幅に減少(令和3年は1.4万千トン、平成23年比で75%)。上位5県では、全ての県が減少。温暖な気候 を好み、生育適温が高いために収穫時期と地域が限定され。また、高齢化等により多くの県で生産量が減少している。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,252トンで減少傾向(平成23年比57%)。12月から鹿児島産が入荷し始めて4月にかけて増加していき5月がピークとなり、12~4月までは鹿児島が太宗を占める。5~6月は関東産や東北産が中心。上位10県では、多くの県で大きく減少するなか、平成23年当時出荷がなかった佐賀県のみ増加。

○ そらまめの国内生産量の推移 千トン 20 ■国内生産量 15 10 19 18 18 17 17 16 15 15 15 14 14 5 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 24年 25年 2年

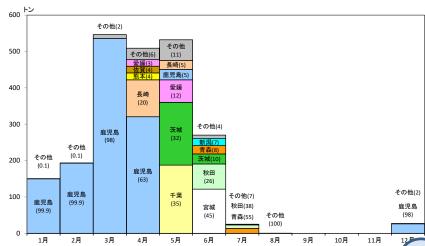
○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量



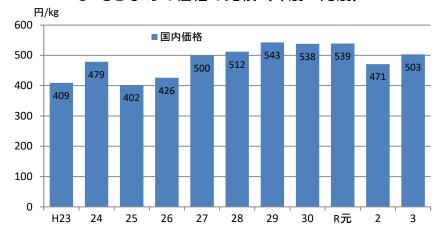
令和3年

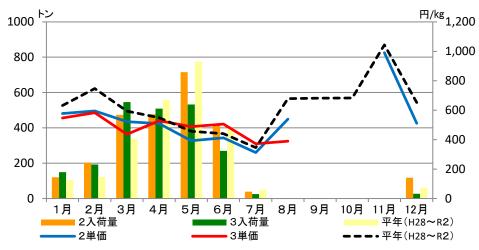


42

- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり372~583円の幅で推移している。入荷量の減少もあり、近年価格が上昇していたが、令和3年は503円となった。コロナの影響で飲食店の需要の減少も一因と考えられる。
- 主産県では、鹿児島県が12~5月までと出荷時期が長いく、その他の産地は4~6月となっている。若い豆は野菜として、 完熟し乾燥させた豆は味噌や醤油の原料や煮豆、甘納豆などに利用。
- 主にチリやフランス、中国などから夏場を中心に、外食産業や惣菜用向けに冷凍そらまめが輸入されている。令和2年及び 3年度は30トン程度が輸入された。

〇 そらまめの価格の比較(年別・月別)



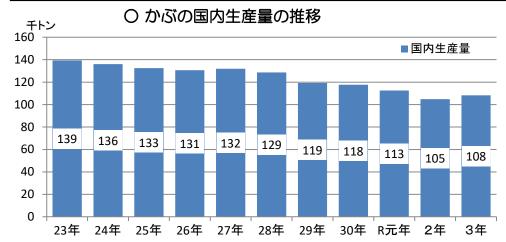


○ そらまめの出回り時期

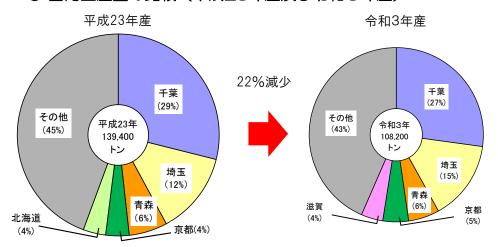
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
鹿児島県	¥											‡
千葉県				lack								
茨城県					lack							
愛媛県				+								
宮城県						$ \mathbf{\psi} $	4					

20 かぶ

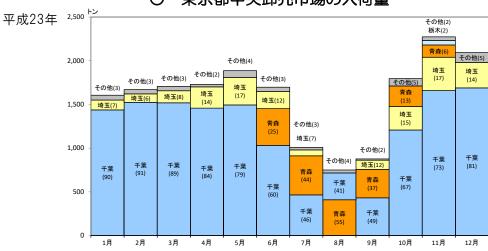
-) 国内生産量は減少傾向(令和3年は10.8万トン、平成23年比で78%)。上位5県では、滋賀県(同106%)を除き減少。 また、家庭用で一般的に用いられる小かぶと千枚漬けなどの加工用に用いられる大かぶが生産されている。令和3年は千葉県 において、前年の台風により茎葉の損傷が発生して肥大が抑制されたため生産量が減少した。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.4万トンで減少傾向(平成23年比72%)。10~6月が主な入荷時期で、周年で千葉県が大半を占め、6~10月は青森県の入荷量が増加。上位10県では、栃木県及び茨城県が大幅な減少となる一方、平成23年当時入荷が少なかった新潟県(同17倍)及び神奈川県(同534%)、その他京都府(同229%)及び東京都(同225%)は大きく増加。



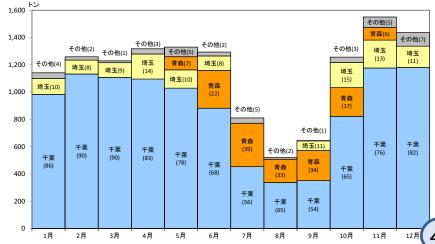
○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 東京都中央卸売市場の入荷量

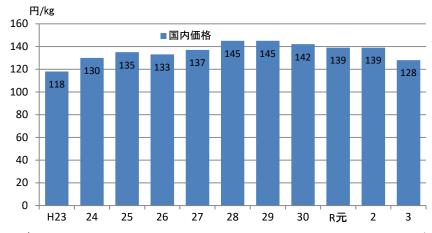


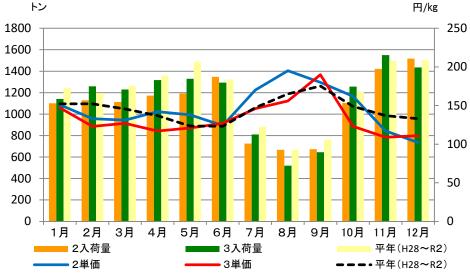
令和3年



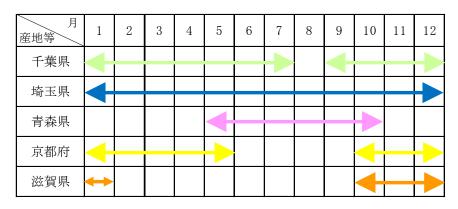
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり111~190円の幅で推移している。入荷量の減少もあり、近年価格が上昇傾向で推移して平成28年以降140円前後で推移していたが、令和3年は128円となった。
- 入荷が少なくなる7~10月は特に価格が高くなる傾向。令和2年は曇天・長雨の影響で7~8月は平年を上回った。また、 令和3年も日照不足、低温や台風の影響で8月下旬~9月中旬までは平年を上回った。

○ かぶの価格の比較(年別・月別)





〇 かぶの出回り時期

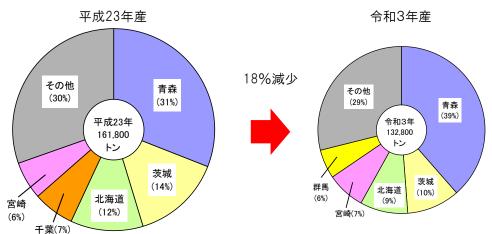


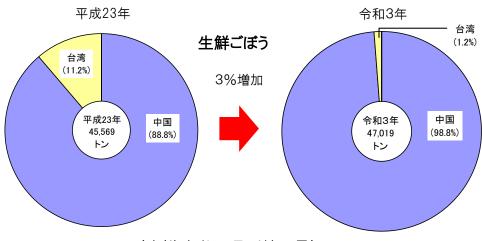
21 ごぼう //

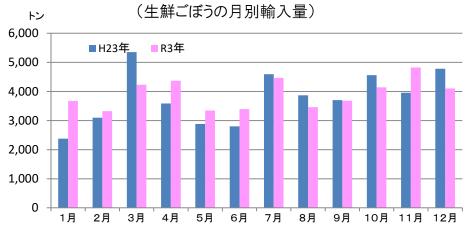
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向(平成23年21.6万トン→令和3年18.9万トン、令和3年比87%)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で70%と減少傾向(平成23年は75%)。
- 国内生産量も減少傾向(令和3年は13.3万トン、平成23年比で82%)。上位5県では、青森県(同102%)のみ増加。令和2年は、青森産が夏場の日照不足等で減少し、12月の出荷量は平年の半分以下となった。
- 〇 令和3年の輸入量は5.6万トンと増加(平成23年比103%)。生鮮ごぼうでも103%と増加した。平成23年に比べて台湾産が9割減少し、中国産のシェアが99%となった。主に加工・業務向けとして中国産は周年で輸入され、台湾産は1年1作で4~7月の輸入量が多い。

〇 ごぼうの国内生産量及び輸入量の推移 チトン ■国内生産量 ■輸入量 25年 30年 R元年 2年 26年 27年 28年 29年 24年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

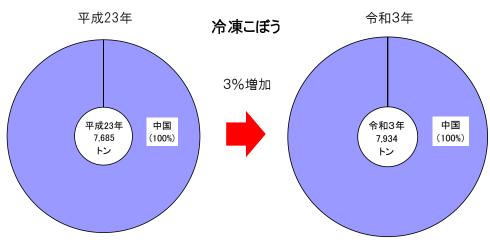




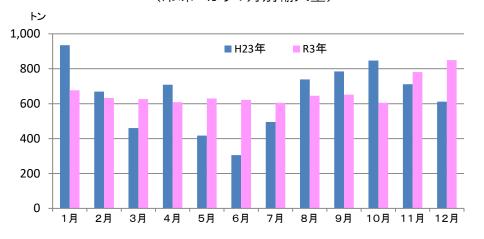


- 令和3年の冷凍ごぼうの輸入量は、7,934トンと増加(平成23年比103%)。令和3年は全量が中国からの輸入となって おり、主に業務用に仕向けられている。
- 〇 令和3年の生鮮ごぼうの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり65円で国産価格386円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の 2割弱程度。この10年間でも2割前後と内外価格差が大きい品目のひとつ。主に外食等の業務用であるが市場にも入荷されている。

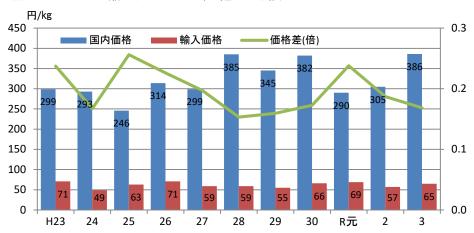
○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



(冷凍ごぼうの月別輸入量)



○ 国産ごぼうと輸入ごぼうの価格の比較



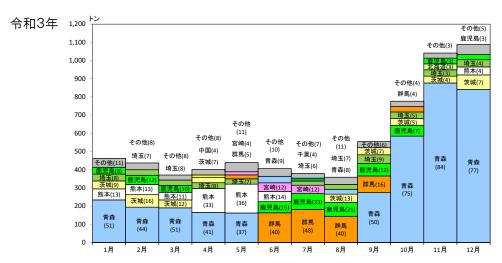
〇 国産ごぼうと輸入ごぼうの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
青森県	lack				*				lack			*
茨城県	lack		*			lack						*
北海道	lack								lack			
中国	lack											*
台湾				 			\					

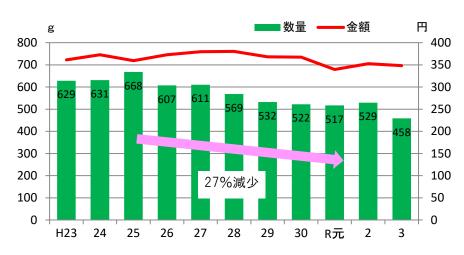
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、6,716トンと減少傾向(平成23年比62%)。青森県、茨城県、群馬県、埼玉県 及び鹿児島県などから周年で入荷されている。上位10県では、中国及び茨城県が大幅な減少となる一方、鹿児島県(同 251%)及び埼玉県(同114%)が増加。東京都中央卸売市場における国内産の価格は、7~11月にかけて下降し、年末需 要の高まる12月に上昇するという傾向がある。中国など外国産の価格は周年200円/kg前後で安定している。
- 〇 令和3年の1人当たりの年間購入数量は458グラムで、年によって増減はあるが減少傾向。1人当たり年間購入金額は348円/kgで、近年350~360円/kg前後で推移。下処理等が面倒で家庭内での調理が減少していることも要因。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量





〇 ごぼうの購入数量と購入金額の推移



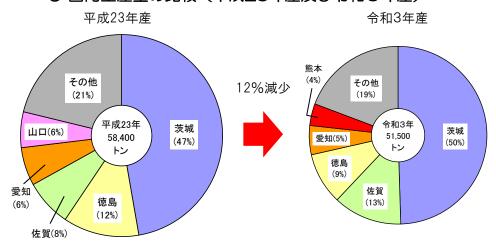
22 れんこん 🌑

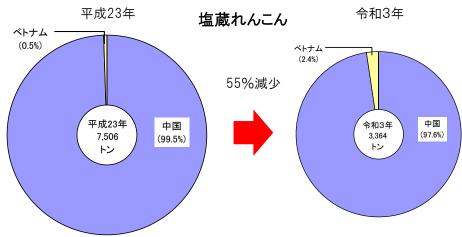
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向(平成23年6.6万トン→令和3年5.5万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で94%(平成23年は89%)。輸入量の減少もあり、国産割合が上昇。
- 〇 国内生産量は令和元年以降6万トンを下回って推移(令和3年は5.2万トン、平成23年比で88%)。茨城県が過半を占めており、上位5県では、佐賀県(同147%)のみ増加。令和元年は台風の影響、3年は茨城県において7月から8月にかけての強風の影響で茎葉が損傷し、根茎の肥大が抑制されて減少した。
- 塩蔵れんこんは、主に中国から水煮など加工・業務用として周年輸入されているが、平成23年以降年々減少している。

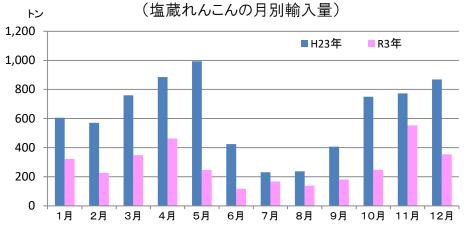
〇 れんこんの国内生産量及び輸入量の推移

千トン 80 ■国内生産量 ■輸入量 70 8 60 50 40 64 63 62 30 60 61 58 56 57 55 53 52 20 10 27年 28年 29年 30年 R元年 25年 26年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



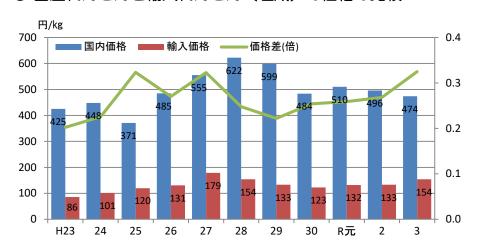




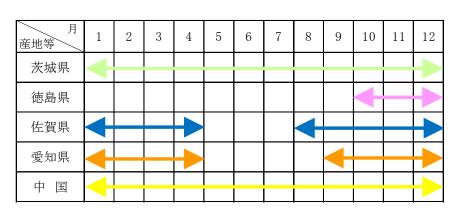
- 令和3年の塩蔵れんこんの輸入価格(CIF価格)は、1 kg当たり154円で国産価格474円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の3割強程度。この10年間でも2~3割と内外価格差が大きい品目のひとつ。生鮮れんこんは、貿易統計では区分されていないが、植物防疫検査実績では、中国から生鮮と冷凍ものが、ベトナムから冷凍ものが輸入されている。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、8,585トン(平成23年比97%)で、茨城産が周年で入荷されている。12月は需要の最盛期となり、5月まで続く。6~7月はハウス栽培ものが入荷する。関西地域では、徳島県が主産地で周年入荷されている。上位10県では、平成23年当時入荷が少なかった福島県(同643%)及び新潟県(同273%)、その他千葉県(同424%)、佐賀県(同382%)及び石川県(同369%)は大きく増加した。一方中国産が0.4%まで減少した。

平成23年

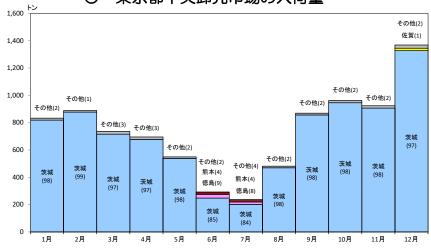
○ 国産れんこんと輸入れんこん(塩蔵)の価格の比較



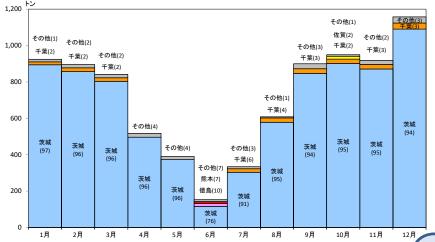
○ 国産れんこんと輸入れんこん(塩蔵)の出回り時期



東京都中央卸売市場の入荷量



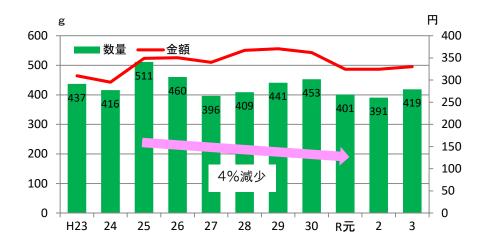
令和3年



50

○ 令和3年の1人当たりの年間購入数量は419グラム(平成23年比96%)で、近年では平成28以降は回復傾向であったが、 値段も高かったことなどから、令和元年から再び減少している。1人当たり年間購入金額は330円/kg(平成23年比107%) となった。

○ れんこんの購入数量と購入金額の推移



23 かんしょ 🥖

- 国内供給量(国内収穫量+輸入量)は、減少傾向(平成23年90.7万トン→令和3年68.8万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で98%と横ばい(平成23年は98%)。

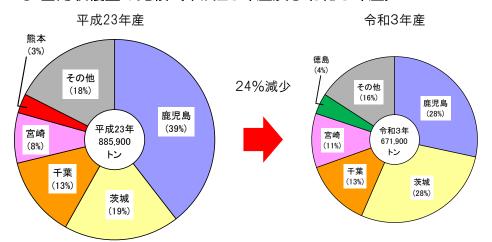
30年 R元年 2年

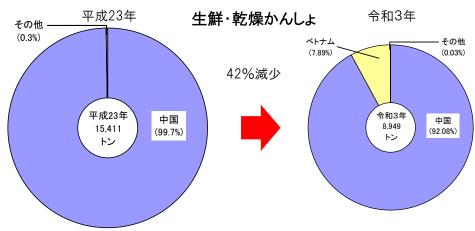
- 国内生産量は年により増減があるものの減少傾向(令和3年は68.8万トン、平成23年比で76%)。上位5県では、茨城県 (同115%)及び徳島県(同108%)が増加。
- 令和3年の輸入量は、平成23年比74%の1.6万トン。生鮮・乾燥かんしょは42%減少しているが、冷凍かんしょが15%増加している。生鮮・乾燥かんしょはほとんどが中国から業務向けに周年で輸入されている。ベトナム産のシェアが拡大。

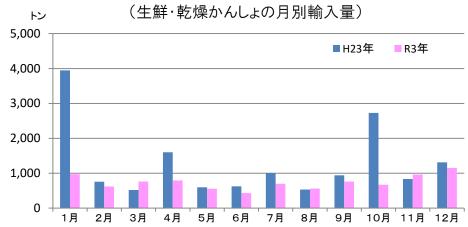
○ かんしょの国内収穫量及び輸入量の推移 1,200 1,000 22 24 25 22 19 19 21 18 17 16 16 400 886 876 942 887 814 861 807 797 749 688 672 200

○ 国内収穫量の比較(平成23年産及び令和3年産)

25年 26年 27年 28年 29年

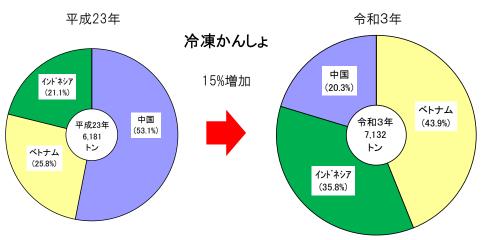




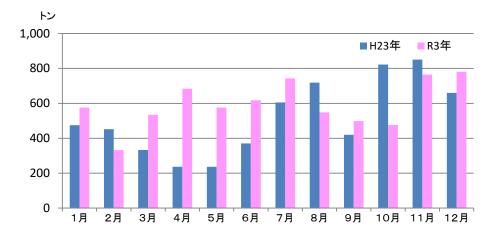


- 令和3年の冷凍かんしょの輸入量は、年々増加傾向(平成23年6.2千トン→令和3年7.1千トン)。主な輸入先国は、ベトナム、インドネシア、中国で、近年インドネシア及びインドネシアのシェアが拡大。
- 〇 令和3年の生鮮・乾燥かんしょの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり215円で国産価格289円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の7割強。平成23年以降、年々価格差が縮まっている。乾燥かんしょの輸入量が増え、全体の輸入品価格が上昇。
- 乾燥かんしょは、でん粉用に利用される。また、冷凍かんしょは、焼き芋に加工された形で輸入され、増加している。生 鮮・乾燥、冷凍とも周年で業務用として仕向けられている。

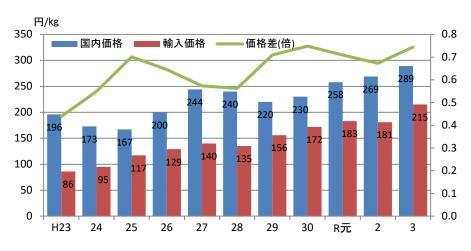
○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



(冷凍かんしょの月別輸入量)



○ 国産かんしょと輸入かんしょ(生鮮・乾燥)の価格の比較

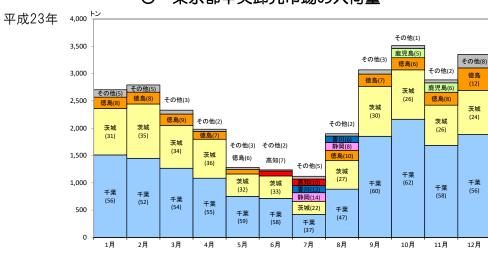


○ 国産かんしょと輸入かんしょの出回り時期

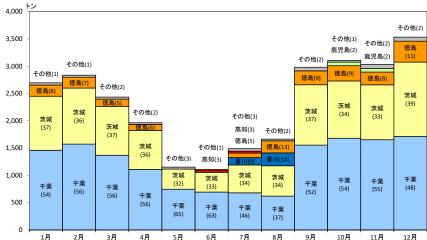
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
鹿児島県	lacktriangledown											left
茨城県	*											
千葉県	lack											→
中国(生鮮)	lack											+
ベトナム(冷凍)	+						l					

- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2.8万トンと横ばい(平成23年比99%)。千葉県及び茨城県が2大供給産地で、 量的には少ないが徳島県及び鹿児島県が周年で入荷。主産地の入荷が少なくなる6~7月は香川県及び高知県からも入荷。上位10県では、平成23年当時入荷が少なかった埼玉県(同195%)、香川県(同148%)及び茨城県(同120%)が増加。
- 〇 令和3年の1人当たりの年間購入数量は871グラムで、平成23年比べて4%減少。食味の良い品種が開発されたことで安定的に消費されている。1人当たり年間購入金額は401円/kgで、ここ10年間で最も高い。平成27年以降は350円/kg前後で推移。令和3年は、前年に引き続いて鹿児島でさつまいも基腐病拡大のため生産が減少し、価格が高かった。

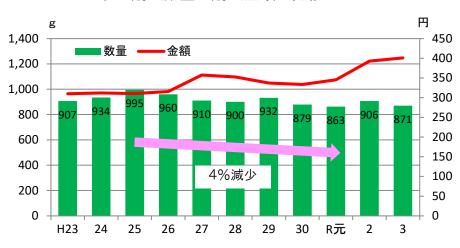
東京都中央卸売市場の入荷量



令和3年



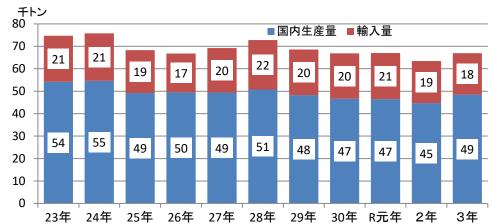
○ かんしょの購入数量と購入金額の推移



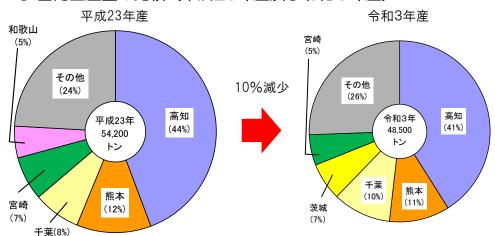
24 しょうが 🍑

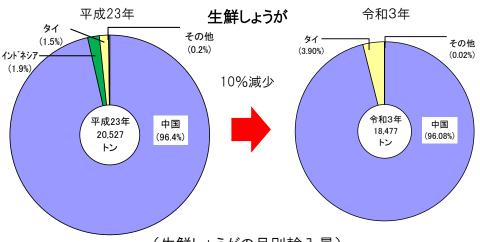
- つ 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向(平成23年7.5万トン→令和3年6.7万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で72%とほぼ横ばい(平成23年73%)。
- 国内生産量は減少傾向(令和3年は4.9万トン、平成23年比で89%)。近年4.7万トン前後で推移。上位5県では、千葉県 (同123%)のみ増加。
- 〇 令和3年の生鮮しょうがの輸入量は、1.8万トンで、平成23年比90%と減少。主に中国から周年で輸入され、量販店等で販売される。タイの輸入割合が拡大。国内産も減少し、5月にかけて価格も上昇するため、3月の輸入量が多くなっている。

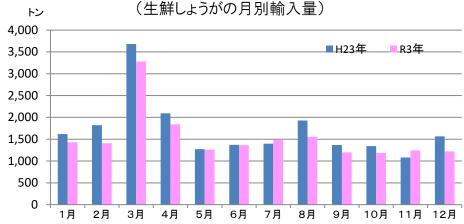
○ しょうがの国内生産量及び輸入量(生鮮のみ)の推移



○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

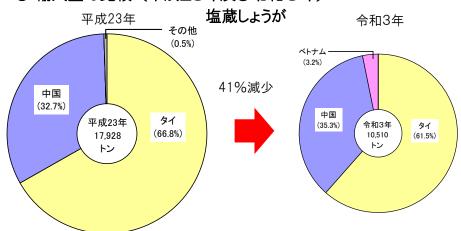




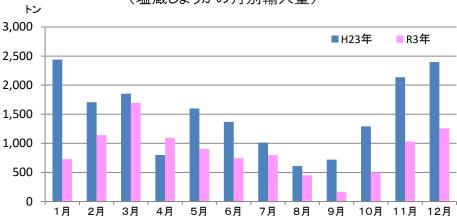


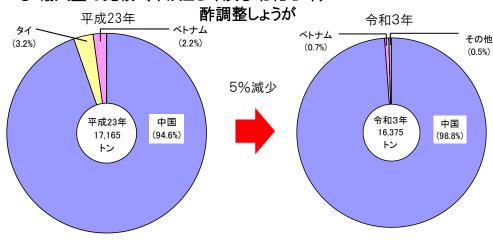
- 〇 令和3年の塩蔵しょうがの輸入量は、1.1万トンで減少傾向(平成23年比59%)。ベトナム及び中国の輸入割合が増加。
- 令和3年の酢調整しょうがの輸入量は、1.6万トンと減少(平成23年比95%)。ほとんどが中国からのもの。近年、ベトナムとタイの輸入割合が減少。
- 塩蔵・酢調整しょうがは、甘酢しょうがのガリや梅酢漬けの紅ショウガなどの原料等として輸入。
- 塩蔵しょうがを輸入して、日本国内で塩抜きをして製品を製造するか、輸入先国で製品に近いものに加工し、酢調整しょうで輸入するかは、関税(塩蔵9%、酢調整12%)、価格、製造コストを勘案して選択されている。

○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)

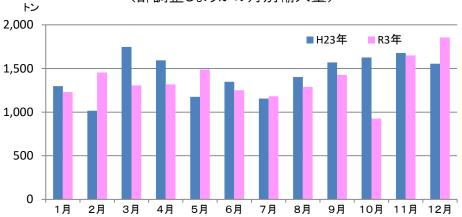


(塩蔵しょうがの月別輸入量)



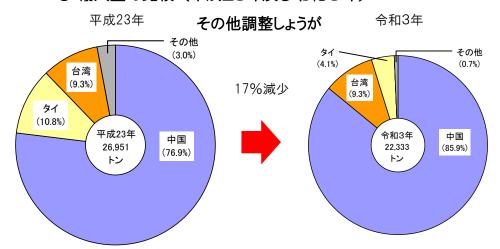


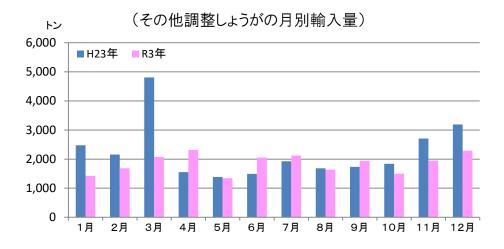
(酢調整しょうがの月別輸入量)



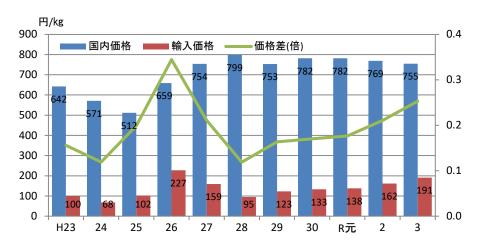
- 令和3年のその他調整しょうがの輸入量は、2.2万トンで減少傾向(平成23年比83%)。中国の割合が増加しており、主に、チューブ入りしょうがの原料になっている。
- 令和3年の生鮮・乾燥しょうがの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり191円で国産価格755円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の2.5割程度。この10年間では高値となった平成26年を除き1~2割と、内外価格差が極めて大きい品目。平成26は中国産が作付面積の減少と収穫直前の干ばつで生産量が約3割減少した等から高値となった。令和3年は中国産がコロナ禍から中国国内の物流の停滞、海上運賃の上昇等から高値となった。
- 生鮮しょうがは、業務用として使用されることもあるが、中国産は主に周年で卸売市場に入荷され、量販店等で販売される。

〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産しょうがと輸入しょうが(生鮮)の価格の比較



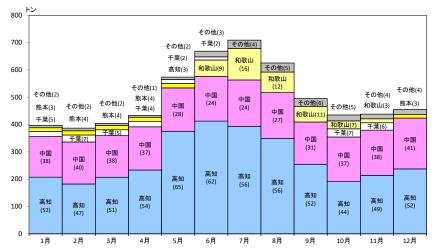
○ 国産しょうがと輸入しょうがの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
高知県	+											-
熊本県	4											
千葉県					+							
中国	lack											1
タイ	$ igotalow{+} $											-

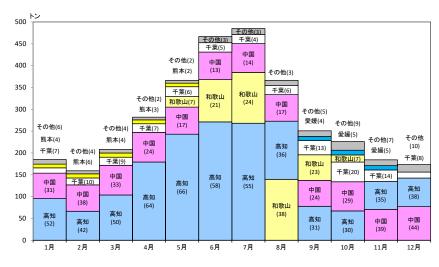
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量(根しょうが)は、3,353トンと大きく減少(平成23年比56%)。高知県産及び中国産ともに大きく減少。上位10県では、茨城県(同711%)、タイ(同373%)、千葉県(同142%)、和歌山県(同126%)及び長崎県(同116%)は増加。
- 根しょうがは周年で入荷されている。6~8月に増える和歌山県は新しょうがである。また、千葉県等で生産されている葉 しょうがは6~8月に多く入荷される。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量





令和3年

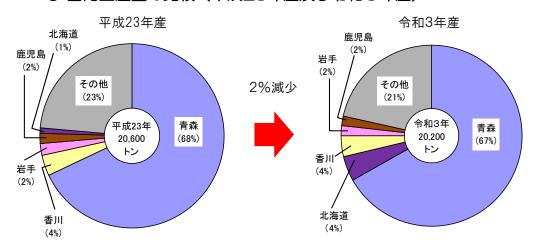


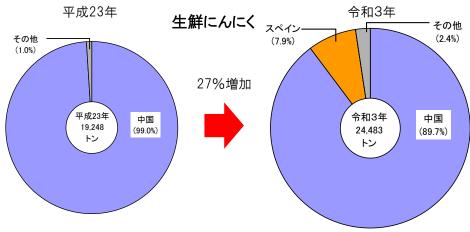
25 にんにく 🍐

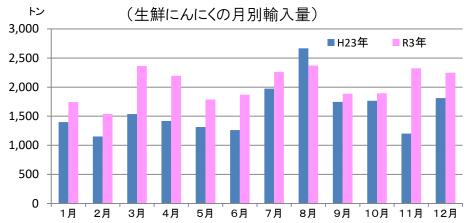
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、増加傾向(平成23年4.0万トン→令和3年4.5万トン)。輸入量が微増している。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で45%と減少(平成23年52%)。
- 〇 国内生産量は、この10年間2万トン前後で推移(令和3年は2.0万トン、平成23年比で98%)。青森県のシェアが67%を 占め、上位5県では、北海道(同456%)のみ増加。青森県及び香川県は横ばい。
- 令和3年の輸入量は2.4万トンで平成23年に比べ27%増加。中国産の輸入割合が90%を占めるが、近年スペインの割合が増加。その他は米国やアルゼンチンなどから輸入されている。

○ にんにくの国内生産量及び輸入量(生鮮)の推移 チトン 50 — ■国内生産量 ■輸入量 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 2年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



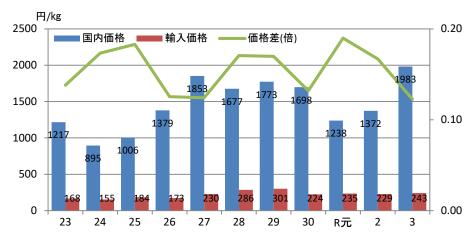




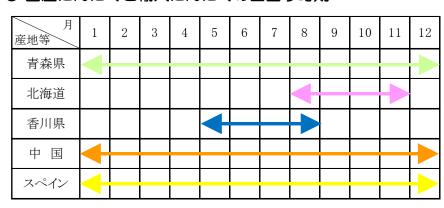
- 令和3年の生鮮にんにくの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり243円で国産価格1,983円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の1.2割程度。この10年間では1~2割と、内外価格差が極めて大きい品目。輸入品は、円高や海上輸送費の上昇により、価格が上がった。国内産は大ぶりで品質が高く、中国産は小ぶりで1片が小さく皮をむくのに手間がかかる。中国産は量販店でも販売されているが、その多くが米国産を含めて業務用に使用されている。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,373トンと減少(平成23年比52%)。中国産の入荷量が半減したことが要因。 青森県と中国産が主体で周年入荷されている。上位10県では、生産が拡大している北海道(同217%)、千葉県(同 431%)及び茨城県(同157%)からの入荷が増加。また、輸入が増加しているスペイン産(同29倍)の入荷も大幅に増加。

平成23年

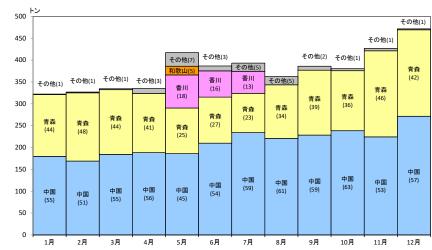
○ 国産にんにくと輸入にんにくの価格の比較



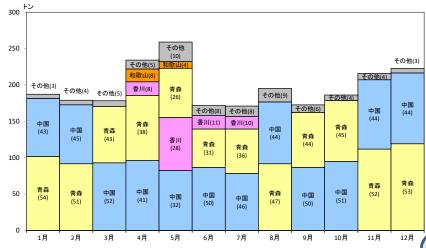
○ 国産にんにくと輸入にんにくの出回り時期



つ 東京都中央卸売市場の入荷量

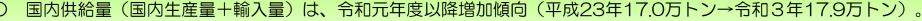


令和3年



60

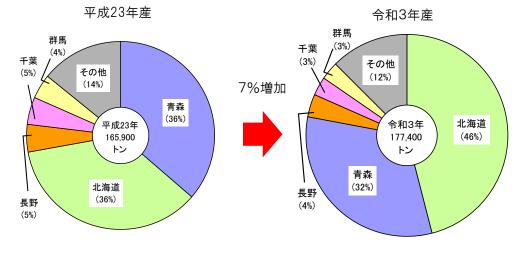
26 やまのいも

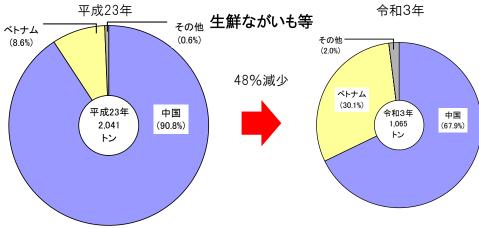


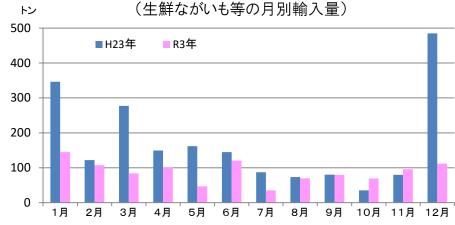
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で99%(平成23年98%)。
- 国内生産量は令和元年以降増加傾向(令和3年は17.7万トン、平成23年比で107%)。上位5県では北海道(同137%) 以外減少。平成28年は、北海道・青森が6月の長雨・日照不足、8月の台風により肥大不足で生産量が大きく減少。
- 令和3年の輸入量は平成23年に比べて59%減少。生鮮ながいも等の輸入量は1,065トン(平成23年比52%)。主要輸入 先国は、中国で、周年輸入されており、業務用に一定の需要がある。近年、ベトナムの輸入割合が増加。ベトナムのものは日本で言われているながいもと種類が違う。

○ やまのいもの国内生産量及び輸入量の推移 千トン 200 ■国内生産量 ■輸入量 150 100 177 173 171 166 166 165 163 160 159 157 146 50 24年 25年 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 2年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

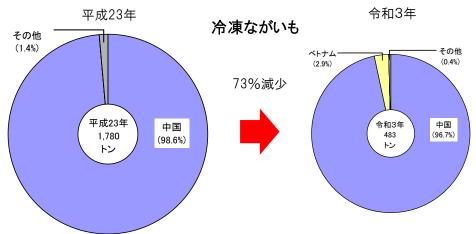


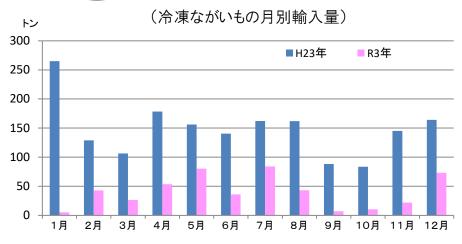




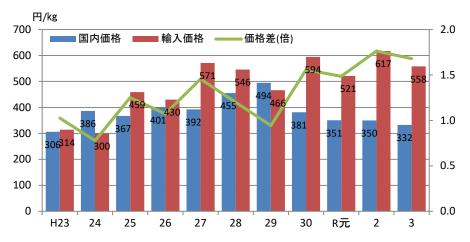
- 令和3年の冷凍ながいもの輸入量は、483トンで大幅に減少(平成23年比27%)。冷凍食品の材料や製品として輸入されている。
- 令和3年の生鮮ながいも等の輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり558円で国産価格332円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の1.7倍。この10年では0.6~1.8倍で推移しており、近年輸入価格が上昇。中国国内の消費が増加したことや輸送コスト、人件費の上昇などにより、価格が上昇。30年は中国で台風、長雨の影響から大不作となり高騰したこと、令和2年は、コロナウイルス感染拡大で、産地等での作業停滞や輸送価格の上昇等から、国産価格との格差が拡大した。
- 中国産は、卸売市場には入荷されず、加工・業務用として実需者に供給。

〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)





○ 国産やまのいもと輸入ながいも(生鮮)の価格の比較

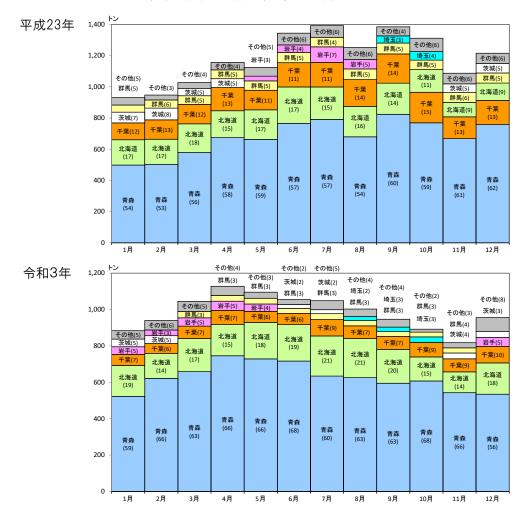


○ 国産やまのいもと輸入ながいもの出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
北海道												
北海坦												
青森県												
育綵県	7											
長野県												
文對乐	7											
中国												
1. 🖼	7											
ベトナム												
			7									

〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.1万トンと減少(平成23年比83%)。ながいもの入荷量が増加した。主産地はながいもでは青森県、北海道、やまのいも等(いちょういも、自然薯等)では群馬県、千葉県等となる。主な収穫期間は11~12月であるが、長期貯蔵により周年で出荷。上位10県では、10年前は東京市場にほとんど出荷がなかった新潟県(同218倍)及び鳥取県(同719%)や長野県(同182%)及び北海道(同102%)が増加。

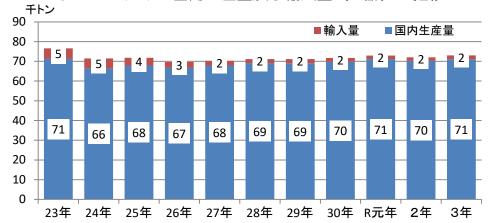
〇 東京都中央卸売市場の入荷量



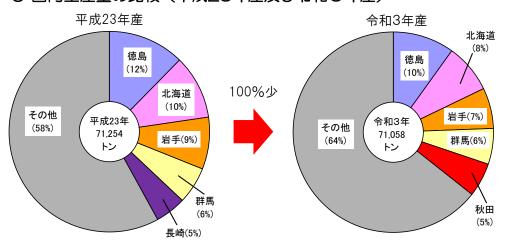
27 生しいたけ

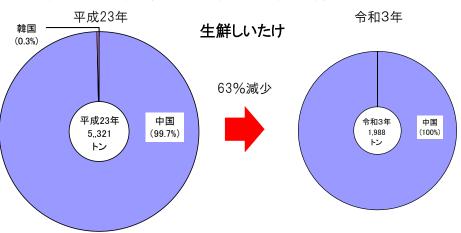
- In
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、平成22年をピークに減少傾向であったが、平成24年以降は7.1万トン前後で推移 (平成23年7.7万トン→令和3年7.3万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、輸入量の減少もあり、令和3年で97%と上昇(平成22年93%)。
- 国内生産量は近年横ばい傾向(令和3年は7.1万トンで、平成23年比で99.7%)。上位5県では、秋田県(同118%)のみ増加。菌床栽培の専用品種の開発も進み、また、収穫まで4~5ヵ月(原木栽培は約2年)であることから、菌床栽培の生産量が年々増加(全体に占める菌床栽培の割合:平成23年85%→令和3年93%)。
- 令和3年の輸入量は平成23年に比べて約6減少。ここ10年間で年々減少している。令和3年は全量中国からの輸入。

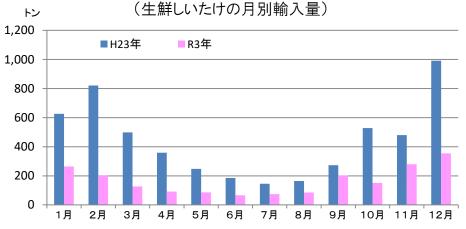
○ 生しいたけの国内生産量及び輸入量(生鮮)の推移



○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

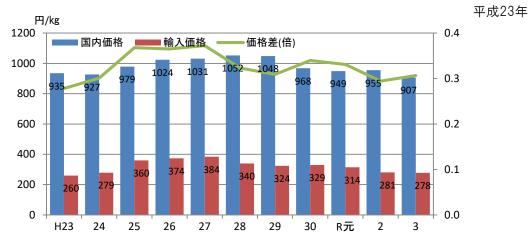




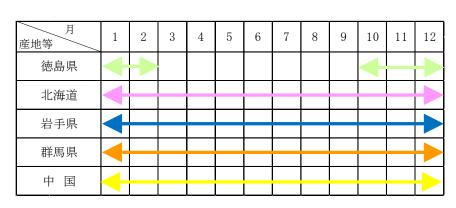


- 令和3年の生鮮生しいたけの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり278円で国産価格907円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の3割程度。この10年間では2~4割と内外価格差が比較的大きい品目。輸入価格は他の品目に比べても、年間を通じて比較的安定している。平成27以降価格が下降気味に推移している。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、7,490トンで減少傾向(平成23年比96%)。中国産の入荷量が75%減少。主要5県(千葉県、秋田県、岩手県、栃木県、福島県)から周年入荷されており、秋から冬にかけての入荷が比較的多い。上位10県では、10年前は東京市場にほとんど出荷がなかった千葉県(同80倍)と福島県(同204%)、栃木県(同116%)及び秋田県(同116%)が増加。

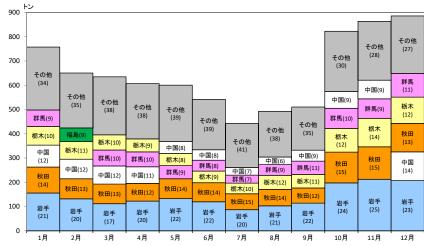
○ 国産生しいたけと輸入生鮮しいたけの価格の比較



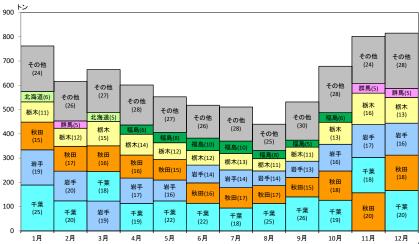
○ 国産生しいたけと輸入生鮮しいたけの出回り時期



〇 東京都中央卸売市場の入荷量

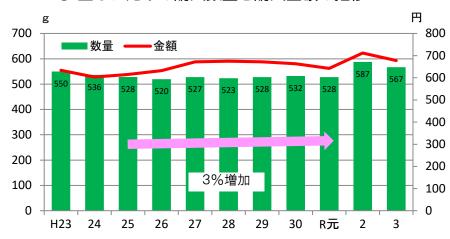


令和3年



○ 令和3年の1人当たりの年間購入数量は567グラムで、平成23年に比べて3%増加。平成22年をピークに年々減少していたが、平成25年以降は購入数量は530グラム前後、購入金額も660円前後で推移。令和2年及び3年はコロナの影響で家庭内消費が増えたと考えられる。

○ 生しいたけの購入数量と購入金額の推移

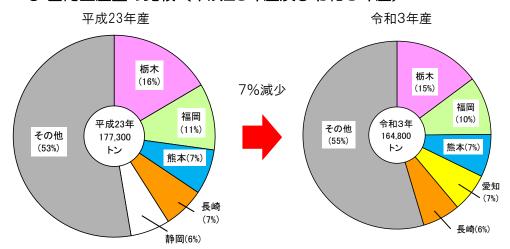


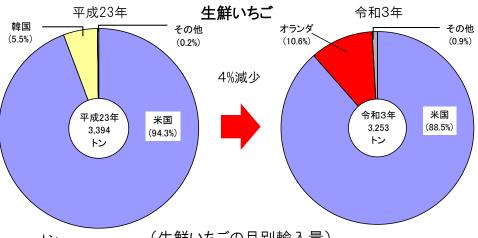
28 いちご

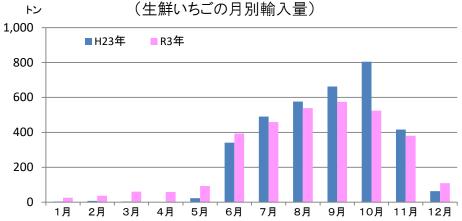
- 国内供給量(国内生産量+輸入量(生鮮のみ))は、減少傾向(平成23年18.1万トン→令和3年16.8万トン)。近年は 16.5万トン前後で推移。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で98%と横ばい(平成23年98%)。
- 〇 国内生産量は近年16万トン前後で推移(令和3年は16.5万トン、平成23年比で93%)。上位5県では、愛知県(同102%)のみ増加。主産地である栃木県、茨城県、静岡県など多くの県で、県で育種した品種の生産振興を図っている。
- 令和3年の生鮮いちごの輸入量は3,253トンで平成23年に比べて4%減少。主に米国から輸入され、ケーキやジャムなどの材料に使用される。主に国産の出回りが少なくなる6~11月に業務用向けとして輸入され、近年、オランダのシェアが拡大。

○ いちごの国内生産量及び輸入量(生鮮)の推移 チトン 200 ■国内生産量 ■輸入量 3 3 3 3 3 3 3 150 100 177 166 165 163 164 164 162 165 159 159 159 50 0 23年 24年 25年 26年 27年 28年 29年 30年 R元年 2年

○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

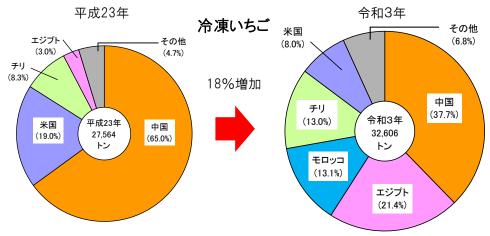






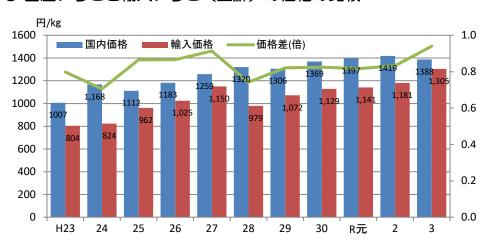
- 冷凍いちごは、主にジャムやジュースなどの原料に使用され、令和3年の輸入量は3.3万トンに増加(平成23年比118%)。 周年で輸入され、国産が少なくなってくる5~6月の輸入量が増加。主な輸入先国は、中国、エジプト、モロッコ、チリ、米 国で、近年、米国及び中国のシェアが大きく減少し、チリ、エジプト、モロッコのシェアが拡大。
- 〇 令和3年の生鮮いちごの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり1,305円で国産価格1,388円(東京都中央卸売市場の卸売価格)の9割程度。平成21年以降は7~9割で推移し、年々輸入価格が上昇している。近年はコロナ禍と海上運賃の上昇も一因。
- 米国産は、国産がほとんどない時期に輸入され、主にケーキの具材、ジャムの原料として使用される。

○ 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



(冷凍いちごの月別輸入量) トン 5,000 ■H23年 R3年 4,000 3,000 2,000 1,000 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

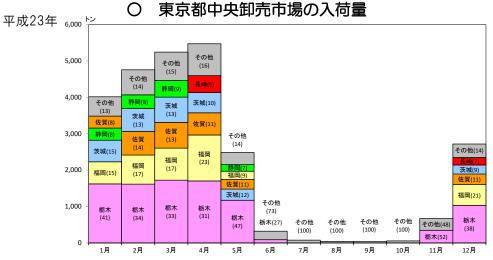
○ 国産いちごと輸入いちご(生鮮)の価格の比較

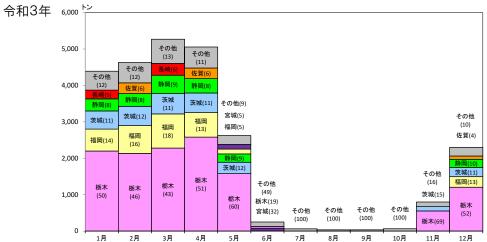


〇 国産いちごと輸入いちごの出回り時期

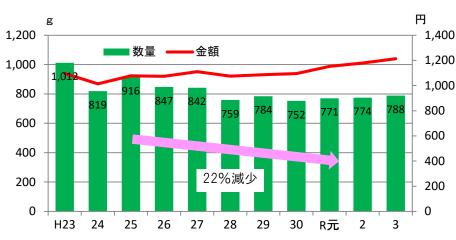
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
栃木県	lack									V		+
福岡県	4				1						lack	
熊本県	4				-						lack	
米 国						+					\	
オランダ						lack					1	

- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2.6万トンでやや減少(平成23年比99%)。3月が最盛期で11~5月が主な入荷時期となる。端境期となる夏場は、米国産が中心となるが、北海道や東北、長野の高冷地で夏秋いちごの生産が増えている。上位10県では、熊本県(同246%)、栃木県(同135%)及び静岡県(同104%)が増加。10年前は入荷が少なかった宮城県(同17倍)が大幅に増加。
- 令和3年の1人当たりの年間購入数量は788グラムで、平成23年に比べて78%と近年780グラム前後で推移。近年、1 パック300グラムで販売していたものを食べきりサイズにするため、200グラムのものを追加したこと等が購入数量の減少に つながっていると考えられる。また、主産県から新たな品種が出荷され、消費者は好みによりセレクトできるようになった。





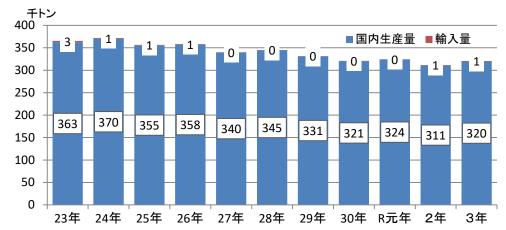
〇 いちごの購入数量と購入金額の推移



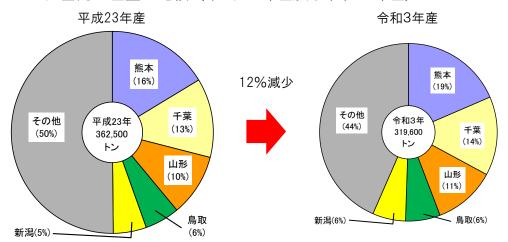
29 すいか 🀠

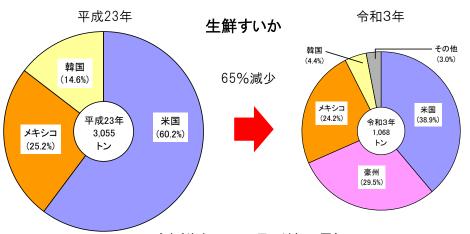
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、減少傾向(平成23年36.6万トン→令和3年32.1万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で99.7%。
- 国内生産量は減少傾向(令和3年は32.0万トン、平成23年比で88%)。上位5県を含めてすべての県で減少。
- 〇 令和3年の輸入量は1,068トンで減少傾向(平成23年比35%)。米国産、メキシコ産が8月、豪州産が秋以降中心に輸入され、国内価格に応じて輸入量が増減。主な輸入先国は、米国、豪州、メキシコ、韓国で、近年豪州産(令和元年から輸入された)割合が増加。業務用にカットされたものが冷凍すいかとしてベトナムやタイから輸入されている。

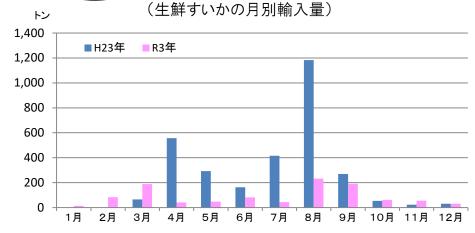
〇 すいかの国内生産量及び輸入量の推移



○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)

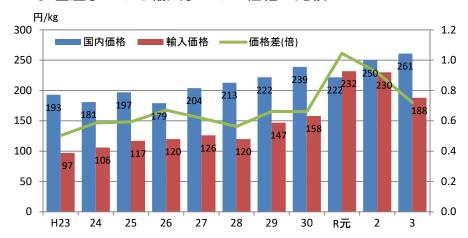




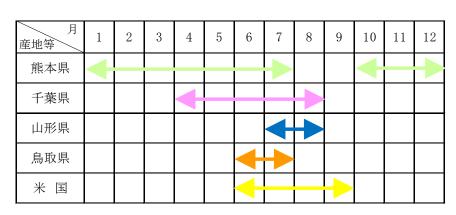


- 令和3年の生鮮すいかの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり188円で国産価格261円(東京都中央卸売市場の卸売価格) の7割程度。国内価格は4月から下降し、出荷ピークを迎える8月に最安値となる。9月以降、徐々に上昇する。元年及び2 年は、元年から輸入が始まった豪州産が、価格が高い年末から年明けに多いことから、輸入価格が上昇したと考えられる。
- 米国産は、平成23年が猛暑で国内の出荷量が少なくなり高値となったことから輸入が増加し、その後減少しているものの、 夏場の7~9月を中心に輸入されており、業務用筋から米国産への一定の需要があることが伺える。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、4.1万トンで微減(平成23年比98%)。夏を代表とする果実的野菜として、5~8月に集中している。4月にハウス栽培ものの入荷が始まり、その後トンネル、露地栽培ものが順次入荷される。

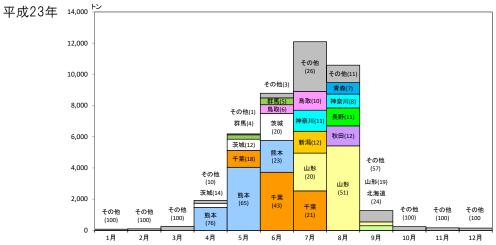
○ 国産すいかと輸入すいかの価格の比較

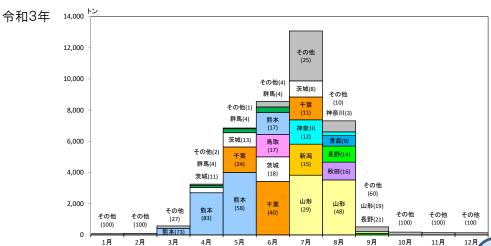


○ 国産すいかと輸入すいかの出回り時期



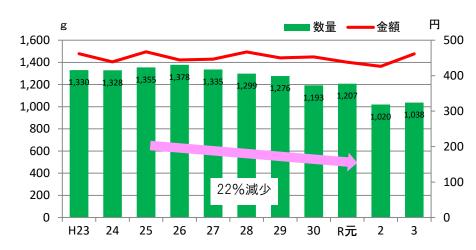
〇 東京都中央卸売市場の入荷量





- 東京都中央卸売市場へ入荷されている上位10県では、鳥取県(同130%)、新潟県(同121%)、熊本県(同110%)及び茨城県(同106%)が増加。
- 令和3年の1人当たりの年間購入数量は1,038グラムで、平成23年に比べて78%と平成26年以降減少傾向。購入数量が ここ10年間で2番目に少なくなった。長雨や冷夏が続くと消費も伸び悩む。最近では、世帯人数の減少等から小玉すいかや カットされたものが多くなっており、販売金額によって購入数量が変動する。

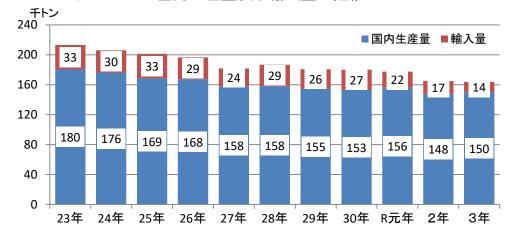
〇 すいかの購入数量と購入金額の推移



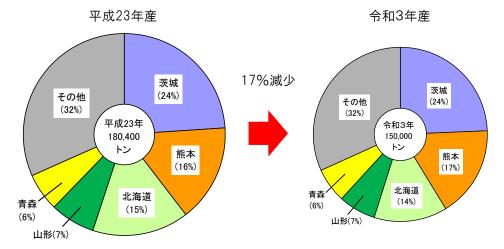
30 メロン 🌭

- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、近年、減少傾向で推移(平成23年21.3万トン→令和3年16.4万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、92%と増加(平成23年85%)。輸入数量が減少したことが要因。
- 国内生産量は大きく減少(令和3年は15.0万トン、平成23年比で83%)。上位5県を含めてすべての県で減少。
- 令和3年の輸入量は平成23年に比べて58%減少し1.4万トン。生鮮メロンは、カットフルーツやケーキの原材料等として 周年輸入されている。豪州産がメキシコ産を上回り1位となった。近年、ホンジュラス、グアテマラなど南米からの輸入増加。

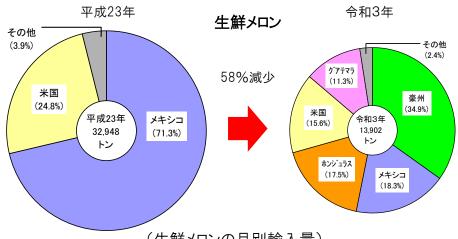
〇 メロンの国内生産量及び輸入量の推移

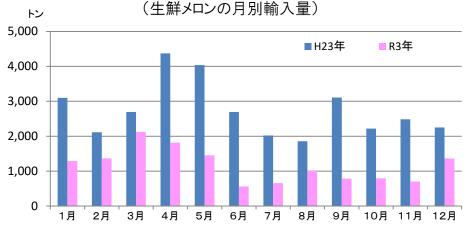


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



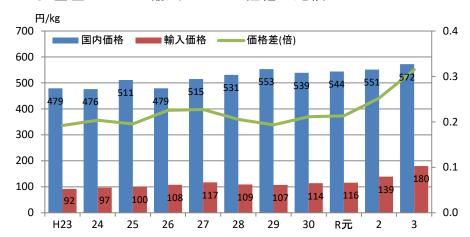
〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



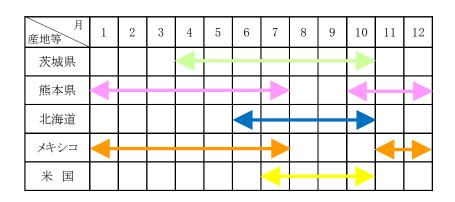


- 令和3年の生鮮メロンの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり180円で国産価格572円(東京都中央卸売市場の卸売価格) の3割程度。この10年は2~2.5割と内外価格差が大きい品目。多くはネット系ではないメキシコ産、米国産のハネジューメロン、豪州産のオレンジキャンディーメロンであるが、近年増加しているホンジュラス産は赤肉系(ネットメロン)で、その割合が増加したこと、令和3年は円安や海上運賃の上昇等で輸入価格が上昇していると考えられる。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.8万トンで減少傾向(平成23年比76%)。上位10県等では、愛知県(同 144%)及び青森県(同141%)が増加。

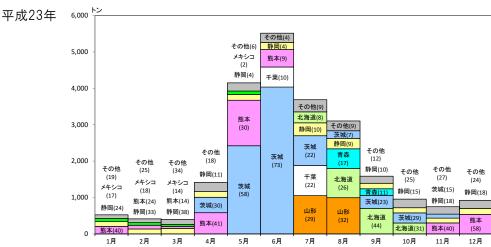
○ 国産メロンと輸入メロンの価格の比較



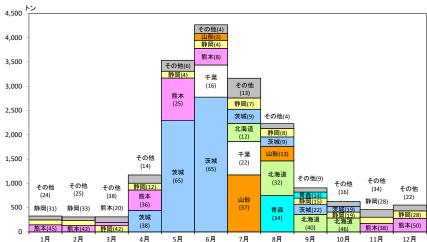
〇 国産メロンと輸入メロンの出回り時期



東京都中央卸売市場の入荷量

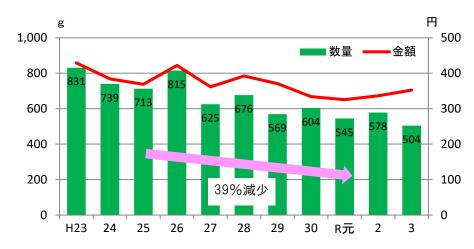


令和3年



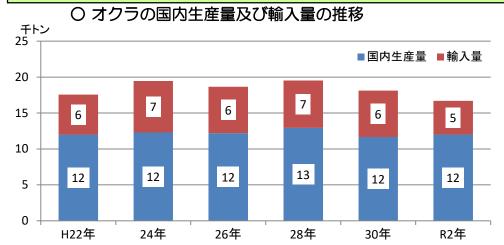
○ 令和3年の1人当たりの年間購入数量は504グラムで、平成23年に比べて61%と大きく減少。購入数量がここ10年間で 最も少なくなった。平成16年頃までは家庭で1個単位で購入していたが、18年以降はカットされたものを購入するように なったことも要因。また、カットメロンは輸入メロン(ノーネット系メロン)が使われていることが多いこともあり、令和3 年の購入価格は353円となり、近年350円前後で推移している。

〇 メロンの購入数量と購入金額の推移

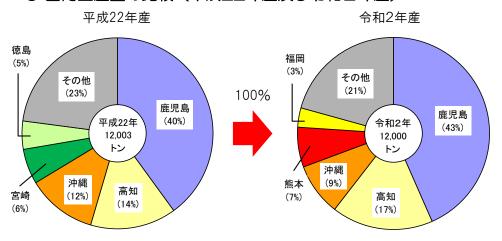


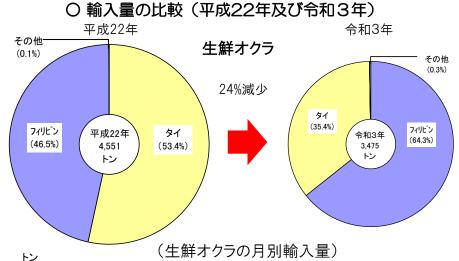
31 オクラ (特認野菜)

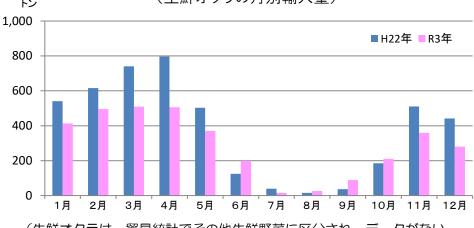
- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、輸入量が減少したこともあり、平成22年に比べて減少(平成22年1.8千万トン→ 令和2年1.7万トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和2年で64%と輸入量に応じて変動(平成22年は68%)。
- 国内生産量は1.2万トン前後で横ばい(令和2年は1.2万トン、平成22年比で100%)。上位5県では、熊本県(同154%)、高知県(同117%)及び鹿児島県(同109%)で増加。
- 〇 輸入量は、年によって増減があるが業務用向けに輸入され、令和3年は3.9千トンで、平成22年に比べて70%と減少。生鮮オクラも76%と減少。フィリピンとタイから夏場は少なくなるものの輸入され、国内価格に応じて輸入量が増減。



○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和2年産)



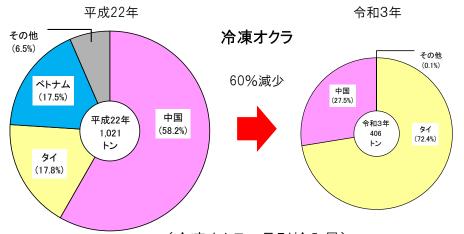


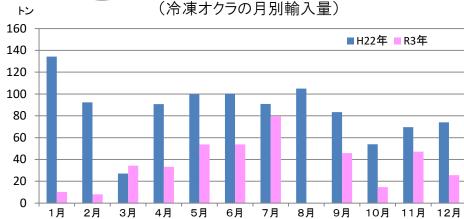


(生鮮オクラは、貿易統計でその他生鮮野菜に区分され、データがない。 植物防疫の国別検査数量を国別輸入数量として代用した。)

- 冷凍オクラは、タイや中国から、主に外食産業や惣菜用として周年で輸入。令和3年の輸入量は406トンで、平成22年に 比べて40%と大きく減少。タイのシェアが大きく増加。(平成23年の植物防疫所検疫統計データを取得できなかったので、 22年と比較する。生鮮オクラも同じ。)
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,375トンで減少傾向(平成23年比88%)。上位10県では、10年前はほとんど出荷がなかった埼玉県(同361%)と高知県(同130%)、沖縄県(同115%)及び熊本県(同110%)が増加。国産の出回りが少なくなる12月から翌年4月まではフィリピン産が入荷量の大半を占めている。

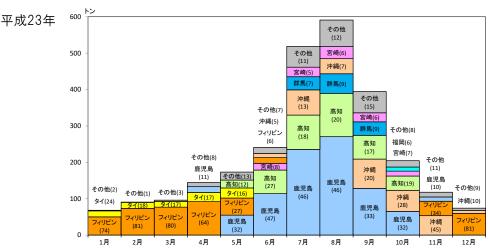
〇 輸入量の比較(平成22年及び令和3年)



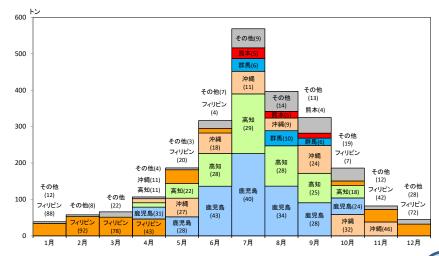


(冷凍オクラは、貿易統計でその他の冷凍野菜に区分され、データがない。植物防疫の国別検査数量を輸入数量として代用した。)

〇 東京都中央卸売市場の入荷量

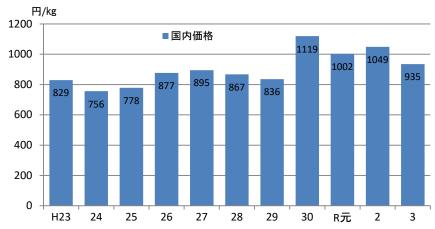


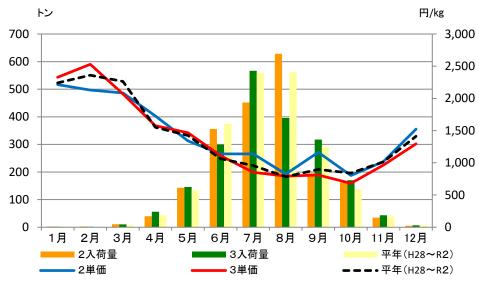




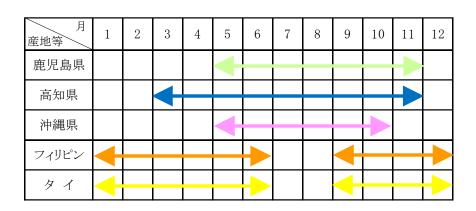
○ 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は1kg当たり682~2,529円(年平均935円)で推移している。国産の入荷量が大幅に減少する1月から3月が最も高くなる。鹿児島県の本格入荷が始まる4月以降は月を追うごとに価格が下がり、国産の入荷がピークとなる7~8月が最も安くなる。

○ 国産オクラの卸売価格の推移(年別・月別)





○ 国産オクラと輸入オクラ(生鮮)の出回り時期



特認野菜

特認野菜とは、「特にその供給の安定を図る必要がある野菜として農林水産大臣が定めるもの」として、県知事からの申請により、その消費量、生産事情、出荷事情等の面から定められている野菜である。

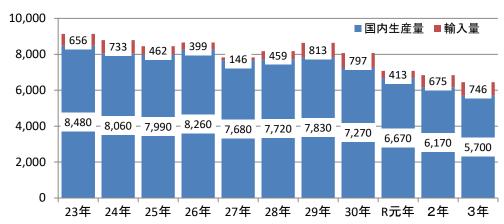
現在、以下の6品目が定められている。

- オクラ(高知県、鹿児島県及び沖縄県)、ししとうがらし(高知県)、にがうり(熊本県、宮崎県、鹿児島県及び高知県)、にっきょう(鳥取県、宮崎県及び鹿児島県)及びわけぎ(広島県)
 - () 内は、対象県である。

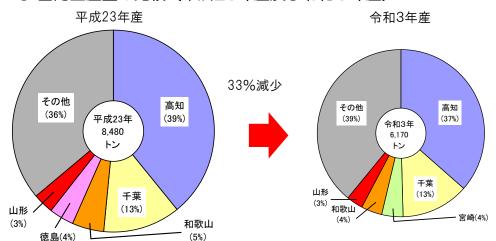
32 ししとうがらし(特認野菜)

- 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、年々、減少傾向。(平成23年9,136トン→令和3年6,446トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和3年で88%と低下傾向(平成23年93%)。
- 〇 国内生産量は減少傾向(令和3年は5,700トン、平成23年比で67%)。上位5県では増加した産地はない。主に業務用 (天ぷら等)で使用される。
- 令和3年の輸入量は746トンで平成23年に比べて114%と増加。韓国産が輸入量の69%を占めているが、ニュージーランド産のシェアが増加。

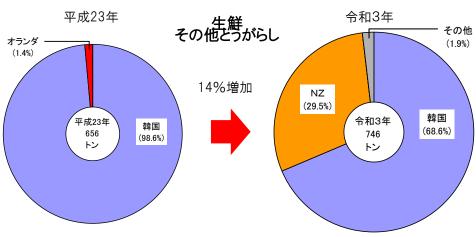
○ ししどうがらしの国内生産量及び輸入量の推移

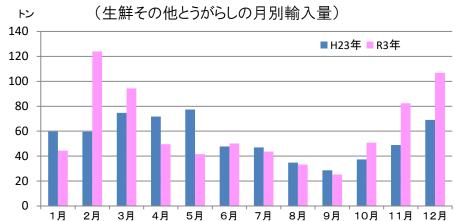


○ 国内生産量の比較(平成23年産及び令和3年産)



〇 輸入量の比較(平成23年及び令和3年)



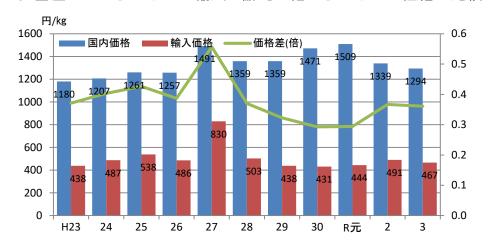


- 令和3年の生鮮ししとうがらしの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり467円で国産価格1,294円(東京都中央卸売市場の 卸売価格)の4割程度。この10年は3~6割程度で推移。国産が少なくなる11月以降は上昇基調で、年末需要(忘年会等) もあり12月が最高値となる。年明け以降、国産の増加とともに値を下げ、国産の入荷ピークの6~9月の価格が最も安くなる。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、947トンで減少傾向(平成23年比71%)。上位10県では、10年前当時は入荷が少なかった宮崎県(同39倍)、群馬県(同37倍%)長崎県(同309%)及び香川県(同494%)と山形県(同162%)が増加。韓国産が国産の少ない時期に補完的に入荷されていたが、令和3年の入荷量は平成23年比4%と激減。高知県が主体となり、周年で入荷されている。

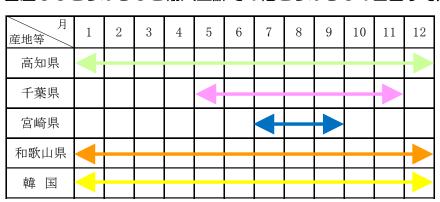
平成23年

令和3年

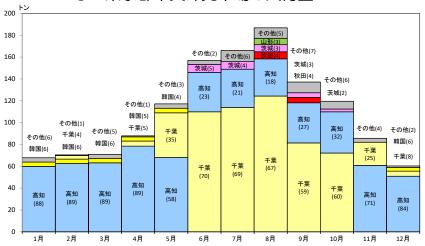
○ 国産ししとうがらしと輸入生鮮その他とうがらしの価格の比較

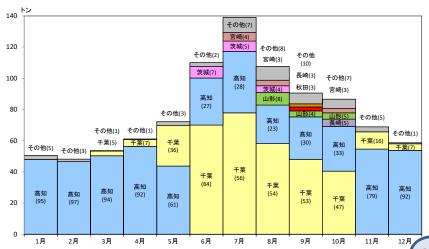


○ 国産ししとうがらしと輸入生鮮その他とうがらしの出回り時期

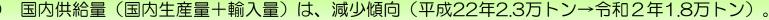


〇 東京都中央卸売市場の入荷量



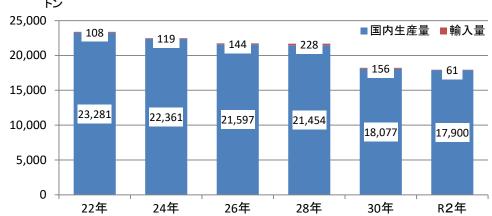


33 にがうり (特認野菜)

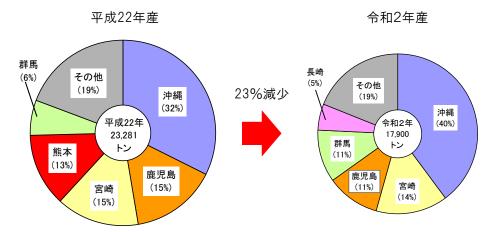


-) 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和2年で99.7%(平成22年は99.5%)。
- 〇 国内生産量は近年、減少傾向(令和2年は1.8万トン、平成22年比77%)。上位5県では、群馬県(同133%)のみ増加。
- 令和3年の冷凍にがうりの輸入量は66トンで、平成23年に比べ61%と減少。(生鮮にがうりの輸入:16年275トン→30年365kg→令和3年0と激減)。この10年間で中国産が激減。タイ産及びインドネシア産のシェアが大きく拡大。外食産業や惣菜用に使用されている。(平成23年の植物防疫所検疫統計データを取得できなかったので、22年と比較する。)

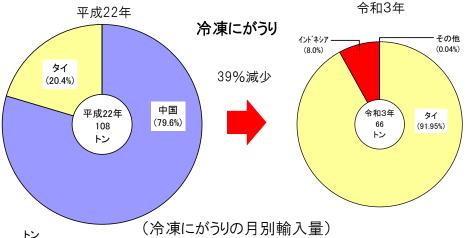
〇 にがうりの国内生産量及び輸入量の推移

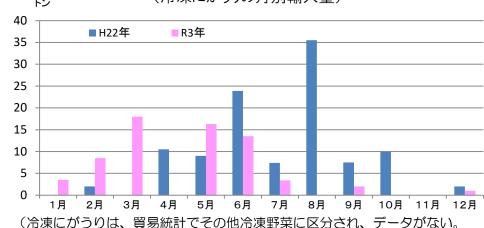


○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和2年産)



〇 輸入量の比較(平成22年及び令和3年)





(冷凍にがうりは、貿易統計でその他冷凍野菜に区分され、データがない。 植物防疫の国別検査数量を輸入数量として代用した。)

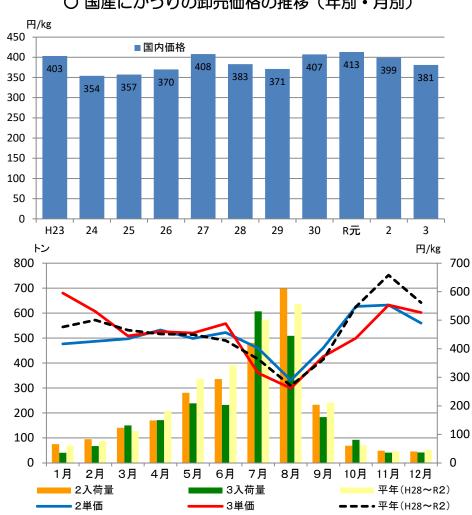
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,377トンで減少傾向(平成23年比68%)。上位10県では、茨城県(同 116%) 及び栃木県(同104%)が増加。
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は1kg当たり262~595円(年平均381円)で推移している。国産の入荷量が大 幅に減少する年末の11月から12月が最も高くなる。年明け以降、沖縄県の増加とともに値が下がり、国産の入荷がピークと なる8月が最も安くなる。

〇 東京都中央卸売市場の入荷量

平成23年 800 その他 その他 700 鹿児島(長崎(10) 600 茨城 長崎(10) その他(4) 500 その他 熊本(4) 鹿児島 (23) 400 (22) その他 300 (34) 鹿児島 茨城(11) 長崎(9) 200 宮崎(11) 群馬(21) 鹿児島(20) 鹿児島 鹿児島(23) 沖縄 その他 宮崎 100 茨城(28) 宮崎(24) 沖縄(88) 1月 4月 5月 7月 11月 3月 9月

令和3年 600 その他(4) 栃木(9) 長崎(3) 500 長崎(9) 400 宮崎(11) 300 群馬 その他(6 長崎(8) 200 鹿児島(7 (10) 宮崎(15) 宮崎(18) 宮崎(13) 宮崎(16) 長崎(17) 茨城 群馬(27) 100 その他 その他(7) (12) その他(9) (59) 莎城 沖縄 (93) 1月 3月 4月 5月 7月 8月 9月 11月 12月

○ 国産にがうりの卸売価格の推移(年別・月別)



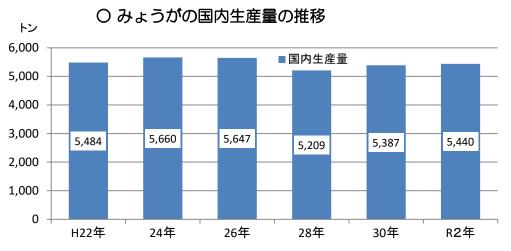
- 沖縄県、宮崎県などの九州の主要産地では、施設栽培で周年生産・出荷を行っている。
- タイ産(冷凍)は国内産の数量が少ない時期に出回っている。

○ 国産にがうりと輸入にがうり(冷凍)の出回り時期

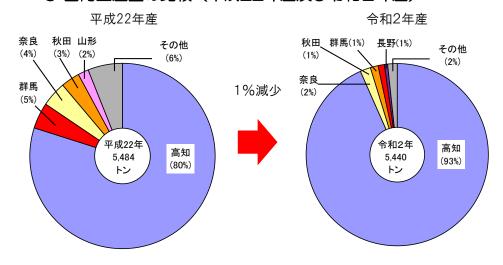
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
沖縄県	lack											+
宮崎県	lack											+
鹿児島県					+							—
群馬県					+							
タイ(冷凍)			lack		-						lacksquare	—

34 みょうが (特認野菜) 🗲

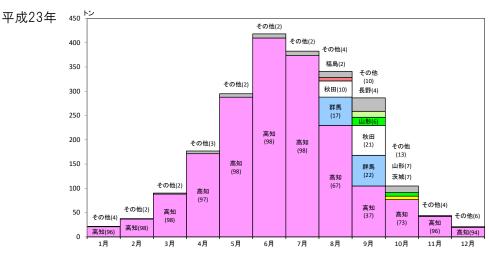
- 国内生産量は5.5千トン前後で横ばい傾向(令和2年は5.4千トン、平成22年比で99%)。上位5県では、高知県(同 116%) のみ増加。
- 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、2,074トンで減少(平成23年比94%)。高知県から周年で入荷され、入荷量全 体の94%を占めている。上位10県では、10年前は東京市場の入荷が少なかった岩手県(同272%)と高知県(同105%) が増加。



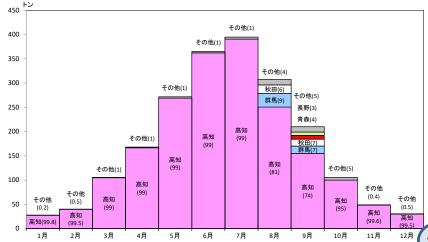
○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和2年産)



東京都中央卸売市場の入荷量

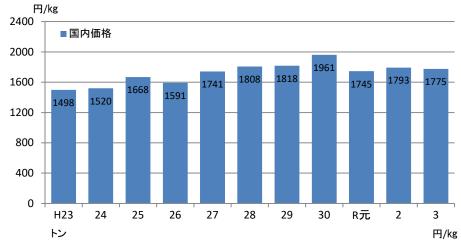


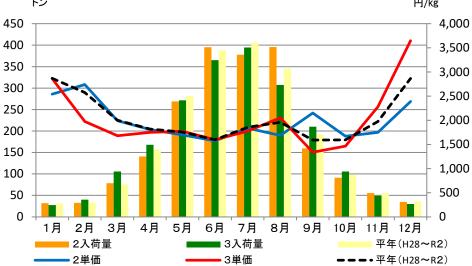
令和3年



- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1kg当たり1,339~3,649円(年平均1,775円)で推移。国産の入荷量が 大幅に減少する11月から1月の価格が最も高くなる。また、薬味として消費量が増える7月から8月にかけて価格が上がり、 秋口の9月に一時的に下落するものの、入荷量が減ってくる年末にかけて上昇する傾向がみられる。
- 施設栽培で周年供給しているが、6~10月が旬である。

〇 みょうがの価格の比較(年別・月別)





〇 みょうがの出回り時期

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
産地等	1	۷	J	4	J	U	'	O	9	10	11	12
高知県												
	7											
奈良県							lack		+			
秋田県												
	7											
群馬県										4		
和土かりかい							7					
長野県								lack				

35 らっきょう(特認野菜)

-) 国内供給量(国内生産量+輸入量)は、国産・輸入ともに年々減少。(平成22年14.9千トン→令和2年7.9千トン)。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、令和2年は輸入量の減少によりで93%と上昇(平成22年83%)。
- 国内生産量は減少傾向(令和2年は7.4千トンで、平成22年比で60%)。上位5県では、全ての県が減少。
- 令和3年の輸入量は540トンで平成22年比で22%と減少。主な輸入先は中国で、甘酢漬けや醤油漬などに加工されて利用されている。近年は、ベトナムのシェアが拡大。(平成23年の植物防疫所検疫統計データを取得できなかったので、22年と比較する。)

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

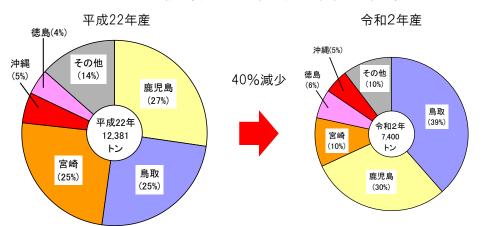
8月

9月

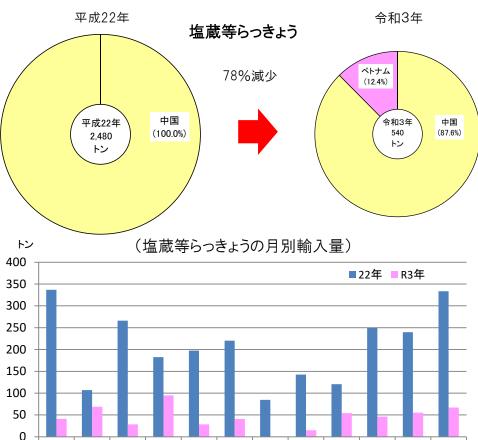
10月 11月 12月

○ らっきょうの国内生産量及び輸入量の推移 トン 16,000 ■国内生産量 ■輸入量 14,000 2,480 2,204 12,000 1,028 1,191 10,000 858 8,000 535 6,000 12,381 11,710 11,429 10,607 4,000 7,767 7,400 2,000 0 H22年 24年 26年 28年 30年 R2年

○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和2年産)

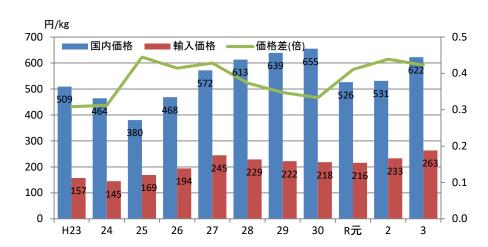


○ 輸入量の比較(平成22年及び令和3年)

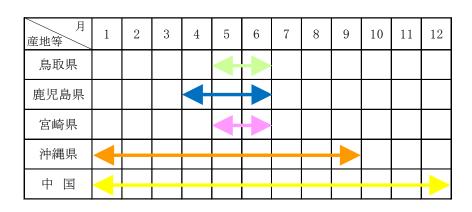


- 令和3年の塩蔵等らっきょうの輸入価格(CIF価格)は、1kg当たり263円で国産価格622円(東京都中央卸売市場の卸売 価格)の4割程度。この10年は3~4割程度と安定している。
- 〇 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、790トンで減少傾向(平成23年比62%)。上位10県では、10年前当時入荷が 少なかった島根県(同20倍)と沖縄県(同112%)が増加。また、入荷の多い5月、6月は安値となるが、ほとんど入荷の ない秋から冬季にかけて価格が上昇する。

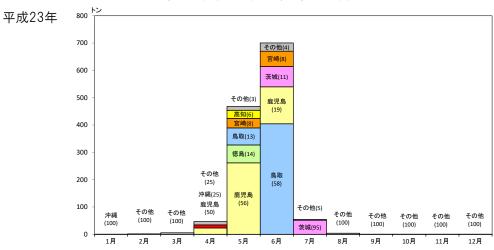
○ 国産らっきょうと輸入らっきょう(塩蔵等)の価格の比較



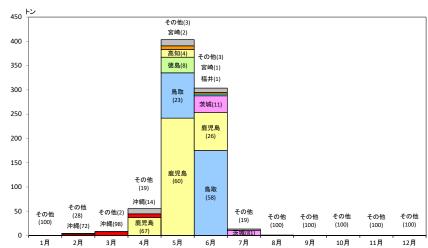
○ 国産らっきょうと輸入らっきょう(塩蔵等)の出回り時期



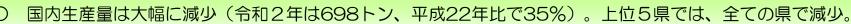
〇 東京都中央卸売市場の入荷量



令和3年

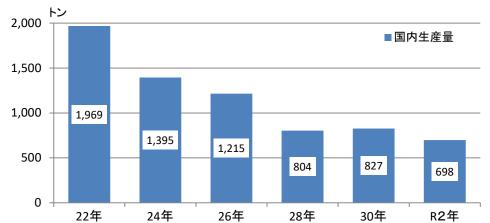


36 わけぎ(特認野菜)

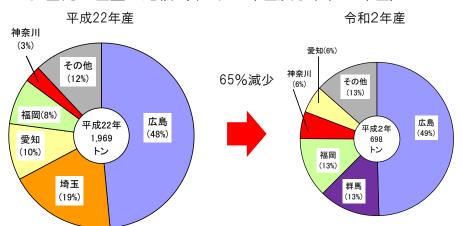


○ 令和3年の東京都中央卸売市場入荷量は、104トンで大きく減少(平成23年比49%)。千葉県、埼玉県、静岡県及び東京 都から周年で入荷。千葉県と埼玉県で入荷量全体の約8割を占めている。上位10県では、埼玉県及び千葉県が大きく減少する 中、10年前は東京市場の入荷が少なかった神奈川県(同472%)と静岡県(同205%)が増加。(関東市場では、わけぎに わけねぎが含まれており、関東産は大部分がわけねぎである。)

〇 わけぎの国内生産量の推移

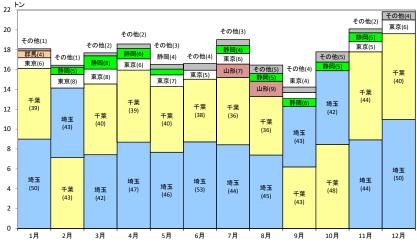


○ 国内生産量の比較(平成22年産及び令和2年産)

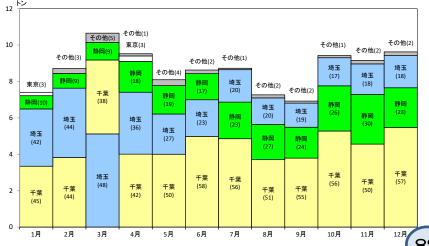


〇 東京都中央卸売市場の入荷量



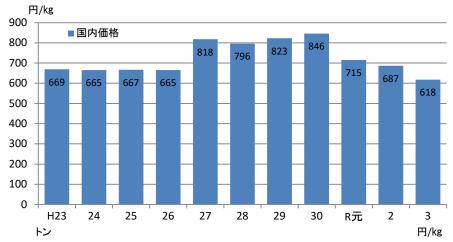


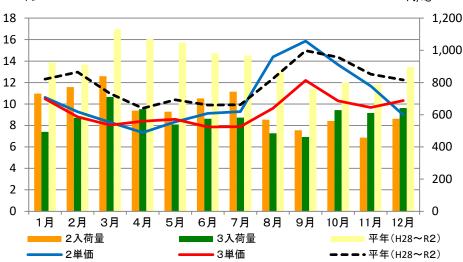
令和3年



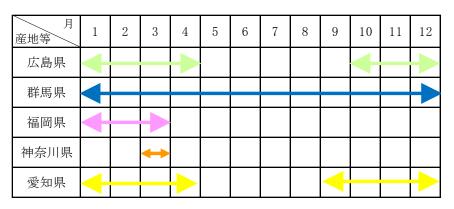
- 令和3年の東京都中央卸売市場の卸売価格は、1 kg当たり524~813円(年平均618円)の幅で推移している。平成26年までは天候不順で高くなった平成22年を除いて600円前後で推移。近年は生産数量の減少もあり、平成22年と同水準の820円/kg前後で推移していたが、令和元年以降価格が下げ基調となっている。令和3年はコロナの影響で業務用需要の減少もあり、ここ10年間で一番低くなった。
- 生産量の多い西日本の産地は、大阪以西の市場への出荷が中心で、東京市場の価格が高くなったときに入荷が増える。

〇 わけぎの価格の比較(年別・月別)





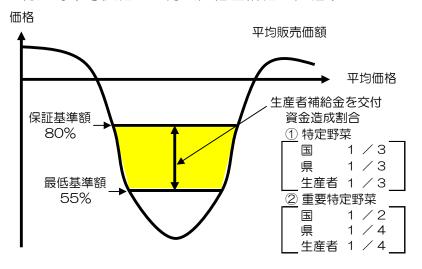
〇 わけぎの出回り時期



(参考) 特定野菜等供給産地育成価格差補給事業の概要(昭和51年創設)

- 都道府県知事が「特定野菜等(35品目)」を消費地に安定供給する集団産地を「特定産地(全国で629産地)」 として指定し、生産者・県・国が積み立てた資金をもとに、特定産地から対象市場に出荷された特定野菜等の販売価格が過去6年平均価格の80%を下回った場合にその差額の8割を価格差補給交付金として交付。
- 特定野菜等供給産地育成価格差補給事業は各都道府県に所在する野菜価格安定法人が運営。

○ 特定野菜等供給産地育成価格差補給の仕組み



※ 特定野菜等(35品目)

①特定野菜(29品目)

アスパラガス、いちご、えだまめ、かぶ、かぼちゃ、カリフラワー、かんしょ、グリーンピース、ごぼう、こまつな、さやいんげん、さやえんどう、しゅんぎく、しょうが、すいか、スイートコーン、セルリー、そらまめ(乾燥したものを除く)、ちんげんさい、生しいたけ、にら、にんにく、ふき、ブロッコリー、みずな、みつば、メロン(温室メロンを除く)、やまのいも、れんこん

②特認野菜(6品目)

オクラ、ししとうがらし、にがうり、みょうが、らっきょう、わけぎ 特認野菜とは、県知事からの申請により「特にその供給の安定を図る 必要がある野菜」として農林水産大臣が定める野菜

○ 特定産地の位置付け(令和2年)

(特定野菜のシェア50%以上を網掛けした)

_(_ <u>○特定野菜(29品目)</u> (単位:%)										<u>(単位:%)</u>	
	品目	作付面積	出荷量		品目	作付面積	出荷量		品目		作付面積	出荷量
	アスパラガス	45.2	49.8	IJ	ら	40.7	50.8	れ	ん	こん	38.8	41.7
	カリフラワー	14.4	19.2	かし	ぼちゃ	15.3	16.5	か	ん	しょ	12.4	11.4
Ŀ	セルリー	62.4	56.1	スイ-	ートコーン	9.6	8.1	د	ょき	うが	33.7	63.3
Ŀ	ブロッコリー	50.1	53.6	えり	だまめ	9.8	7.4	に	ん	にく	58.7	60.0
Li	こ ま つ な	19.1	23.1	グリ-	ーンピース	11.3	11.6	や	まの	いも	62.8	74.8
L	しゅんぎく	15.7	14.8	さや	いんげん	4.2	5.7	生	しい	たけ	_	5.0
7	ちんげんさい	26.1	30.1	さや	えんどう	7.9	10.7	い	ち	Ľ	12.7	14.1
L	ふき	10.4	25.7	そは	らまめ	16.1	34.0	す	い	か	20.1	21.7
ä	み ず な	22.0	27.5	か	ぶ	6.8	5.8	X		ン	3.2	3.8
Γį	みつば	37.3	40.3	ĩ.	ぼう	30.5	27.0		•			

○特認野菜(6品	(単位:%)			
品目	作付面積	出荷量		
オ ク ラ	58.8	62.5		
ししとうがらし	14.5	43.7		
にがうり	26.5	24.7		
みょうが	49.4	95.4		
らっきょう	43.6	52.5		
わけき	58 0	54 6		